

THE JAPANESE JOURNAL OF

HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol.15, No.2.

1980

—目 次—

原 報

貝類生薬の本草学的研究 (第4報)

魁蛤・蛤蜊について浜田善利, 村上誠愷.....49

中国の宋, 金, 元, 明, 清代および中華民国年代における爆竹, 爆仗, 烟火 ...岡田 登.....62

雑 録

岩田重雄氏の“微量天びんの先駆者・飯盛挺造”を読んで根本曾代子.....71

新刊紹介・書評73

会務報告73

会員名簿76

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌

J. His. Pharm.

日 本 薬 史 学 会

THE JAPANESE JOURNAL OF HISTORY
OF PHARMACY, Vol. 15, No. 2 (1980)

CONTENTS

Originals

- Toshiyuki HAMADA** and **Nobuyoshi MURAKAMI**: Historical and Herbological
Studies on the Molluscan Drugs (4), On the “Kui-ge” and “Ge-li”.49
- Noboru OKADA**: Chinese Bamboo-cracker, Bamboo-stick and Fire Works in
Song, Jin, Yuan, Ming, Qing Dynasty and Era of the People's Republic
of China.62

Miscellaneous

- Soyoko NEMOTO**: On the Thesis on “Teizo Iimori, the Pioneer of Microbalance”
wrote by Mr. Sigeo Iwata71
- Book Review73
- News of the Society73
- Membership List76

入会申込み方法

下記あてに葉書または電話で入会申込用紙を請求し、それに記入し、年会費をそえて、
再び下記あてに郵送して下さい。

〒101 東京都 千代田区 神田駿河台 1—8

日本大学 理工学部 薬学科 生薬学教室

滝戸 道夫

電話: 03—293—3 2 0 1 (代)

貝類生薬の本草学的研究 (第4報)¹⁾

魁蛤・蛤蜊について²⁾

浜田 善利³⁾, 村上 誠愷³⁾

Historical and Herbological Studies on the Molluscan Drugs (4)¹⁾

On the “Kui-ge” and “Ge-li”²⁾

Toshiyuki HAMADA³⁾ and Nobuyoshi MURAKAMI³⁾

魁蛤の名称は、神農本草經に海蛤の一名として記載され、以後は各時代の本草書でも、海蛤の中の一つの呼び名として用いられてきた。一方、同じ魁蛤という名称が、名医別録で海蛤とは項目を別にして収載され、これは一名を魁陸、また活東という。こちらの魁蛤もまた、以後の各本草書に一項目として収載されている。従って魁蛤という名称に対して歴史的には二種類の貝類生薬が考えられる。さらに証類本草では、現在からみれば魁蛤と同じ内容をもつと考えられる蚌が、一項目として収載されている。また、蛤蜊は、宋の嘉祐本草にはじめて収載された貝類生薬であるが、この中に蛤蜊粉、海蛤粉という名称があって、これも海蛤との間に混乱がみられる。

魁蛤および蛤蜊は、本来は海蛤・文蛤と異なるものであったが、その名称の混乱から、

ときには混同してとりあつかわれたようである。この点については、第2報⁴⁾でも少しふれたが、今回は、魁蛤および蛤蜊について、文献上の名称の変遷、現在中国で用いられる生薬および標本について検討した。

I 魁蛤について

I-1 名称

魁蛤という名称は、神農本草經⁵⁾の中品^{5a, b, d)}あるいは上品^{5c)}に収載された海蛤の条文の末に「一名魁蛤」とあるのが最初である。この海蛤の一名としての名称は、以後一貫して海蛤の条に記されている。一方名医別録⁷⁾では巻3虫獸部中品において、海蛤と並んで、別の一項目として魁蛤がある。この条文では魁蛤が正名であり、一名魁陸また活東という。そして以後の本草書では、本草經集

1) 前報, 薬史学雑誌, 15 (1), 1~10 (1980).

2) 日本薬学会第100年会 (1980年4月, 東京) にて発表

3) 熊本大学薬学部生薬学教室, *Department of Pharmacognosy, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kumamoto University*. Location: Oehon-machi, Kumamoto city.

4) 浜田善利, 古賀朋子, 村上誠愷, 海蛤・文蛤について, 薬史学雑誌, 14 (2), 53-66 (1979).

5) a) 清願観光重輯, “神農本草經”, 巻3, 中品, No. 235⁶⁾, 人民衛生出版社, 第1版第5次印刷, 1958, p. 76.

b) 明銭塘不遠慮復手録, “神農本經”, 中品, No. 235⁶⁾, 浪華書林, 復刻本, 42オ.

c) 魏吳普等述, 清孫星衍等輯, “神農本草經”, 巻1, 上品, No. 127⁶⁾, 台湾中華書局, 12版, 1970, 48オ, ウ.

d) 森立之編, “神農本草經”, 巻中, 中品, No. 229⁶⁾, 盛文堂, 1971, 13オ.

6) 浜田善利, 薬史学雑誌, 12 (2), 62-69 (1977).

7) 那琦, 謝文全重輯, “重輯名医別録”, 巻3, 虫獸部中品, 中国医薬学院中国薬学研究所, 1977, p. 155.

注⁸⁾、新修本草⁹⁾、大観本草^{10a)}、政和本草^{11a)}等においては、海蛤とは別項目として魁蛤が収載されている。さらに大観本草^{10b)}および政和本草^{11b)}においては、海蛤および魁蛤とは別項目として蚌が虫魚部下品に収載されている。しかしこれらを集成した本草綱目においては、海蛤の条^{12a)}の一名魁蛤を削除し、魁蛤を正名とする項目^{12b)}で、魁陸、蚌、瓦屋子、瓦壘子を別名とする。即ち、証類本草の蚌もまた魁蛤の中に併合されている。

現代の文献では、魁蛤は瓦楞子の別名とされることが多い。中国薬学大辞典^{13a)}では瓦楞子として「処方名、瓦壘子、蚌子殻」、「古籍別名、魁蛤、魁陸（別録）、蚌、蚌、天癭、空慈子、伏老、蜜丁（本草綱目）、毛蚌（俗名）、瓦屋子（嶺表録）」をあげる。中薬志^{14a)}では「瓦楞子、原名蚌」、薬材学¹⁵⁾では「瓦楞子、別名瓦壘子、瓦屋子、魁蛤」とする。こ

の瓦楞子を正式名称とするものは、この他に、北方常用中草药手冊^{16a)}、河北中草药^{17a)}、中薬材手冊^{18a)}、中薬学¹⁹⁾、中薬鑑定学²⁰⁾、中華人民共和国薬典^{21a)}などがあり、辞海^{22a)}も瓦楞子の名をあげる。また、広西薬用動物^{23a)}、および山東薬用動物^{24a)}では、泥蚌を正名とする。南海海洋薬用生物²⁵⁾でもそれぞれ種名として泥蚌^{25a)}、毛蚌^{25b)}および魁蚌^{25c)}をあげ、それらの薬用上の名称は瓦楞子とする。一方中薬大辞典²⁶⁾では、殻を用いるときは瓦楞子^{26a)}とし、肉を用いるときは蚌^{26b)}とする。

これらの名称を TABLE I—III に示す。

I—2 主治

海蛤、一名魁蛤は、神農本草経において「主欬逆上気喘息、煩満胸痛寒熱」とし、名医別録で「療陰痿」を追加、李時珍^{12a)}はまとめて「主十二水満急痛、利膀胱大小腸」（唐

- 8) 陶弘景校注、小嶋尚真、森立之ら重輯、岡西為人訂補解題、「本草経集注」、巻6、南大阪印刷センター、1972、p. 109.
- 9) 岡西為人、「重輯新修本草」、巻16、16ウ、学術図書刊行会、1978、p. 95.
- 10) a) 宋唐慎微撰、艾晟校定、木村康一、吉崎正雄編集、「経史証類大観本草」、巻20、14ウ、廣川書店、1970、p. 466; b) *ibid.* 巻22、6ウ、p. 490; c) *ibid.* 巻22、4ウ、p. 489.
- 11) a) 宋唐慎微原著、金張存惠重刊、那琦解題並序、魏徳文索引刊行、「重修政和經史証類備用本草」、巻20、南天書局、1976、p. 417; b) *ibid.* p. 442.
- 12) a) 明李時珍撰、「本草綱目」、平装6冊本、巻46、商務印書館、2版、1967、6 (23)、p. 30; b) *ibid.* p. 36; c) *ibid.* p. 32.
- 13) a) 「中国薬学大辞典」、上、医薬衛生出版社、1970、p. 339; b) *ibid.* 下、p. 1376、1873.
- 14) a) 中国医学科学院薬物研究所等編、「中薬志」、第4冊、人民衛生出版社、第1版第1次印刷、1961、pp. 20-23、figs. 3-5; b) *ibid.* p. 138.
- 15) 南京薬学院編、「薬材学」、勁華文化服務社、p. 1210、fig. 1297.
- 16) a) 北京部隊后勤部衛生部他合編、「北方常用中草药手冊」、人民衛生出版社、第1版第1次印刷、1971、p. 504、fig. 204; b) *ibid.* p. 124.
- 17) a) 河北省革命委員会衛生局他、「河北中草药」、河北人民出版社、第1版第1次印刷、1977、p. 702; b) *ibid.* p. 979.
- 18) a) 「中薬材手冊」、香港新文書店、pp. 483-484; b) *ibid.* p. 518.
- 19) 成都中医学院主編、「中薬学」、上海科学技術出版社、第1版第1次印刷、1978、p. 114.
- 20) 成都中医学院主編、「中薬鑑定学」、上海人民出版社、第1版第1次印刷、1977、p. 461.
- 21) a) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編、「中華人民共和国薬典」、一部、1977年版、人民衛生出版社、第1版第1次印刷、1978、pp. 94-95; b) *ibid.* p. 592.
- 22) a) 辞海編集委員会、「辞海」、(1977年版)、上海辞書出版社、第1版第1次印刷、1979、中冊、p. 3115; b) *ibid.* 下冊、p. 4267.
- 23) a) 林呂何、「広西薬用動物」、広西人民出版社、第1版第1次印刷、1976、pp. 17-19、fig. 8; b) *ibid.* p. 27.
- 24) a) 紀加義、趙玉清、「山東薬用動物」、山東科学技術出版社、第1版第1次印刷、1976、pp. 41-45、figs. 22-24; b) *ibid.* pp. 55-57、fig. 34.
- 25) a) 中国科学院南海海洋研究所海洋生物研究室、「南海海洋薬用生物」、科学出版社、第1版第1次印刷、1978、p. 50、fig. 83; b) *ibid.* p. 51、fig. 84; c) *ibid.* p. 52、fig. 85; d) *ibid.* p. 69、fig. 107.
- 26) a) 江蘇新医学院編、「中薬大辞典」上冊、上海人民出版社、第1版第1次印刷、1977、pp. 400-401; b) *ibid.* 下冊、p. 2109、text-figs.; c) *ibid.* 上冊、p. 495; d) *ibid.* 下冊、p. 2377、2378.

TABLE I Kui-ge, Hai-ge and Han in the Chinese Literatures

文 献	魁 蛤	海 蛤	蚌
神農本草經		海蛤 一名魁蛤	
名醫別錄	魁蛤 一名魁陸, 活東	海蛤 一名魁蛤	
本草經集注	魁蛤 一名魁陸, 活東	海蛤 一名魁蛤	
新修本草	魁蛤 一名魁陸, 活東	海蛤 一名魁蛤	
大觀本草	魁蛤 一名魁陸, 活東	海蛤 一名魁蛤	蚌
政和本草	魁蛤 一名魁陸, 活東	海蛤 一名魁蛤	蚌
本草綱目	魁蛤, 一名魁陸, 蚌, 瓦屋子, 瓦壘子	海蛤	

TABLE II Wa-leng-zi in the Modern Chinese Literatures

文 献	名 称
中国薬学大辞典	瓦楞子, 処方用名瓦壘子, 蚶子殼 古籍別名魁蛤, 魁陸 (別錄), 蚌, 蚶, 天爵, 空慈子, 伏老, 蜜丁 (本草綱目), 毛蚶 (俗名), 瓦屋子 (嶺表録)
中 薬 志	瓦楞子, 原名蚶
薬 材 学	瓦楞子, 別名瓦壘子, 瓦屋子, 魁蛤
北方常用中草药手冊	瓦楞子, 別名蚶子殼, 毛蛤, 泥蚶, 毛蚶
河 北 中 草 薬	瓦楞子, 別名瓦壘子, 蚶子殼
中 薬 材 手 冊	瓦楞子, 綱目名魁蛤, 別名蚶子殼, 瓦壘子, 瓦壘蛤皮
中 薬 学	瓦楞子
中 薬 鑑 定 学	瓦楞子
中華人民共和国薬典	瓦楞子
辞 海	瓦楞子
中 薬 大 辞 典 (殻)	瓦楞子, 異名蚶殼, 瓦屋子, 蚶子殼, 魁蛤殼, 花蜆殼, 瓦壘蛤皮, 血蛤皮

TABLE III Han in the Modern Chinese Literatures

文 献	名 称
広西薬用動物	泥蚶, 別名蚶, 瓦楞子, 瓦屋子, 瓦弄子
山東薬用動物	泥蚶, 別名蚶子, 血蛤, 瓦壘蛤
南海海洋薬用生物	泥蚶, 俗名瓦弄子, 瓦楞子
"	毛蚶, 俗名瓦楞子, 瓦屋子
"	魁蚶, 俗名瓦楞子
中薬大辞典(肉)	蚶, 異名魁陸, 魁蛤, 復累, 瓦屋子, 蚶子, 伏老, 血蚶, 毛蚶

治「咳嗽氣喘, 胸脇滿痛, 痰多不利, 咯血, 癭瘤痰核, 崩帶等症」, 中薬大辞典^{26c)}では効用を「清熱利湿, 化痰軟堅」, 主治を「治口渴煩熱, 咳逆胸痺, 癭瘤, 痰核, 崩漏, 痔瘻」, 中華人民共和国薬典^{21b)}では効用「清化熱痰, 軟堅, 制酸」, 主治「用干熱痰喘嗽, 胃痛泛酸, 淋巴結核, 白帶; 外治濕疹」とする。

一方, 魁蛤を正名とする方は, 名醫別録で「主瘰癧, 洩痢便膿血」とするが, 李時珍はこの主治は肉について記し, 殻は「治一切血氣冷氣癰癖」(日華), 「消血塊, 化痰積」(震亨) などとする。

現代の文献では, 瓦楞子として, 中薬志では効用「消痰積, 散血塊」, 主治「胃痛吞酸, 老痰積聚等証」とし, 中薬大辞典では効用「化痰, 軟堅, 散瘀, 消積」, 主治「治痰積, 胃痛, 嘈雜, 吐酸, 癭瘤, 癭癰, 牙疳」, 中華人民共和国薬典では効用「軟堅, 散瘀, 制酸, 化痰」, 主治「用干胃痛泛酸, 腹部腫塊, 咳嗽痰粘」とする。なお中薬大辞典では, 肉は蚶

本), 「治水氣浮腫, 利小便, 治欬逆上氣, 項下瘤癭」(臞樞), 「療嘔逆, 胸脇脹急, 腰痛五痔, 婦人崩中帶下」(日華), 「止消渴, 潤五臟, 治服丹石人有瘡」(蕭炳), 「清熱利湿, 化痰飲, 消積聚, 除血痢, 婦人血結胸, 傷寒反汗, 搖搦中風癰瘕」(時珍) とする。

現代の文献では, 海蛤は文蛤と区別せずに蛤殻あるいは文蛤として収載され, たとえば中薬志^{14b)}では効用「清肺熱, 化痰止咳」, 主

の名称で収載し、効用は「補血，温中，健胃」，主治は「治血虚痿痺，胃痛，消化不良，下痢膿血」としている。

これによってみると，蛤殼（海蛤一名魁蛤）は「清化熱痰，軟堅，制酸」の薬として，「熱痰喘嗽，胃痛泛酸，淋巴結核，白帶；湿疹」を治するのに対して，瓦楞子（正名魁蛤）は「軟堅，散瘀，制酸，化痰」の薬として，「胃痛泛酸，腹部腫塊，咳嗽痰粘」を治する。

瓦楞子（正名魁蛤，蚌）の殻の主治を TABLE IV に示す。

I—3 形状および分布

魁蛤の形状および分布について，近代以前の文献では，名医別録で「生東海，正円両頭空，表有文，取無時」，本草經集注で「形似紡，輕小狹長，外有縱横文理」，保昇曰^{12b)}「今出萊州，形円長，似大腹檳榔，両頭有孔」，蔵器

曰^{12b)}「蚌生海中，殼如瓦屋」，李時珍^{11b)}「臨海異物志云，蚌之大者径四寸，背上溝文似瓦屋之壘，肉味極佳，今浙東以近海田種之，謂之蚌田」等とある。

これらをみると，いずれも Anadarinae リュウキュウサルボウガイ亜科の貝類の殻の特徴を記載していて，現代の中薬文献が規定する毛蚌，泥蚌および魁蚌等の形状に一致する。また中国薬物標本図影²⁸⁾に描かれた瓦楞子は生瓦楞と連肉瓦楞子で，これはすべて泥蚌であり，READ^{29a)}が魁蛤としてあげた写真の標本8点も泥蚌である。

次に棲息地についても，これらは中国大陸の沿岸各地の海中に分布し，さらに現在でも養殖しているもので，実状によく即している。

I—4 日本の文献における魁蛤

日本の本草関係の文献では，名称を魁蛤，

TABLE IV Efficacy of Wa-leng-zi recorded in the Chinese Literatures

文 献	主 治
日 華 子 本 草 ^{26a)}	治一切血氣，冷氣，癥瘕。
日 用 本 草 ^{26a)}	消痰之功最大，凡痰隔病用之。
丹 溪 心 法 ^{26a)}	能消血塊，次消痰 ²⁷⁾ 。
本 草 綱 目	連肉燒存性，研伝小兒走馬牙疳有効。
医 林 纂 要 ^{26a)}	去一切痰積，血積，氣塊，破癥瘕，功療癰。
中 藥 志	消痰積，散血塊。胃痛吞酸，老痰積聚等証。
藥 材 学	1. 治痰癰癥瘕，老痰瘀血，胃痛等症。 2. 一般用粉剂，用于月經不調所致的下腹部硬結。又用為制酸藥，又為化痰及補骨藥，並可用干小兒狗癆病。
北方常用中草藥手冊	有軟堅散瘀，消積化痰之功。
河 北 中 草 藥	消痰散結，化痰制酸。
中 藥 材 手 冊	行血軟堅，消癥癖，化痰積。治一切血氣病，冷氣痰癖，癥結血塊，泄痢膿血。
中 藥 学	消痰化痰，軟堅散結。
中 藥 鑑 定 学	軟堅，散結，制酸。
中華人民共和國藥典	軟堅，散瘀，制酸，化痰；用于胃痛泛酸，腹部腫塊，咳嗽痰粘。
中 藥 大 辭 典	化痰，軟堅，散瘀，消積；治痰積，胃痛，嘈雜，吐酸，癥瘕，癰瘍，牙疳。
広 西 藥 用 動 物	消痰軟堅，散結止痛。主治胃痛，吐酸，止血，下痢。
山 東 藥 用 動 物	用于治療胃痛，胃酸過多，症瘕痞塊，痰積，癰瘍等。
南海海洋藥用生物	治胃酸過多，胃潰瘍，十二指腸潰瘍，痰阻經絡，散瘀止血，月經不調，婦女腹痛，小孩軟骨病，淋巴結核等止痛収斂作用。
辞 海	軟堅結，消痰積。治症瘕痞塊，胃脘疼痛，泛吐酸水等症。

27) 本草綱目^{12b)}では，次消痰を化消積とする。
28) 中国医薬研究社，“中国薬物標本図影”，世界書局，3刷，1935年，p. 228。
29) a) B. E. READ, “CHINESE MATERIA MEDICA, TURTLE AND SHELLFISH DRUGS”, 南天書局，復刻版，1977，p. 61, fig. 10; b) ibid. p. 57, fig. 7.

蚌, 瓦楞子としてとりあつかっている。

魁蛤を正名とするものは、まず本草和名³⁰⁾で、「一名魁陸, 活東, 伏老」とし、さらに「蚌」をあげる。多識編^{31a)}では「阿加加伊」の和名をあて、「異名魁陸, 瓦屋子」とする。庖厨備用倭名本草^{32a)}でも「アカガヒ」とし、その他に「サルボウ (関東), シシカヒ (四国)」の名をあげて、「一名蚌, 瓦屋子, 瓦屋子」とする。そして元升曰として「アカガヒノ栗ノ大キサホドナル, 殻アツク, イラカタカキハ関東ニテハサルボウト云フ, 西国ニテハシシカヒト云フ, 其ノウチニモ又大小アリ, ナテアカガヒト云フハ大ニシテ殻ヤヤウスクイラカモヒキシ, 考本草一名ハ蚌, 一名ハ瓦屋子, 一名ハ瓦屋子, 其ノナリアヒ小蛤ニ似テマルクアツシ」とまとめている。

さらに本草綱目啓蒙^{33a)}では、魁蛤の名のもとに、「オウノガイ (古名), イタラガヒ (大和本草), キサ (同上), アカガヒ, ラトコガヒ (佐州)」の名をあげ、また「一種サルボ, 一名ハイガヒ (備前作州), ラフガヒ (土州), チガヒ (同上), ツメキリガヒ (勢州), ムマノツメ (筑紫)」を記しており、これらは「形アカガヒニ似テ大サ一寸許, 瓦礫最粗シ」とする。また別に「一種ウバガヒ」は「モガヒ (備前), マハイ (播州)」といい、「アカガヒニ似テ瓦礫最細クシテ両唇齊カラズ一片短シ, 海藻中ニ在ル」と説明している。

次に蚌を正名とするものは、和漢三才図会^{34a)}で「あかひひ, 魁蛤, 魁陸, 瓦屋子, 伏老, 瓦屋子」とし、「和名木佐, 俗云赤貝」と記している。また大和本草^{35a)}でも、「キサ,

イタラガヒ」として、「アカガヒ也, 一名魁蛤, 又名瓦屋子, 其殻瓦屋に似たり」と説明している。

瓦屋子を正名とするものは用薬須知^{36a)}で、「一名蚌, 赤貝」としている。

さらに大和本草^{35b)}では蚌とは別に朗光をあげ「サルボ³⁷⁾」とし、また物類称呼^{38a)}にも朗光として「サルボ³⁷⁾, つめきり貝 (勢州),



Figs. 1-3: Kui-ge and Han in the Old Literatures

1:本草綱目^{45a)}, 2:本草綱目^{46a)}, 3:和漢三才図会

30) 深江輔仁, “本草和名”, 下巻, 14オ, 新刊多識編, 文化書房, 1973, p. 332.

31) a) 林羅山, “多識編”, 巻4, 27ウ, 新刊多識編, 文化書房, 1973, p. 221; b) ibid. 巻4, 27ウ, p. 220.

32) a) 向井元升, 難波恒雄編集, “庖厨備用倭名本草”, 巻9, 19オ, 漢方文献刊行会, 1978, p. 159; b) ibid. 巻9, 17オ, p. 158.

33) a) 小野蘭山, 杉本つとむ編著, “本草綱目啓蒙”, 巻42, 18オ-19オ, 早稲田大学出版部, 1974, p. 614; b) ibid. 巻42, 15オ, p. 672.

34) a) 寺島良安, “和漢三才図会”, 巻47, 介貝部, 中外出版社, 1901, 第2冊, p. 698; b) ibid. p. 697.

35) a) 貝原益軒, “大和本草”, 巻14, 介類, 江戸岡田屋嘉七他, 1709, 34ウ, b) ibid. 34オ, c) ibid. 31オ.

36) a) 松岡玄達, 難波恒雄編集, “用薬須知”後編, 巻3, 6ウ, 漢方文献刊行会, 1972, p. 362; b) ibid. 巻4, 19ウ, p. 186.

37) サルボはサルボウのことである。

38) a) 越谷吾山, 東條操校訂, “物類称呼”, 巻2, 動物, 岩波書店, 第3刷, 1977, p. 63; b) ibid. p. 63.

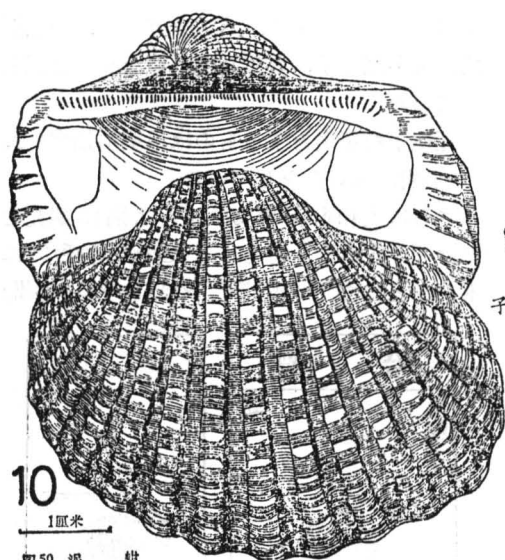


图50 泥 蚶

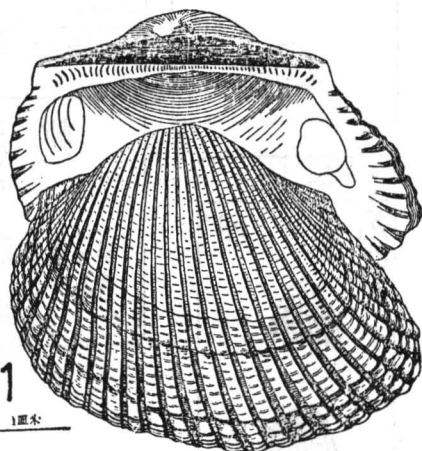


图51 毛 蚶

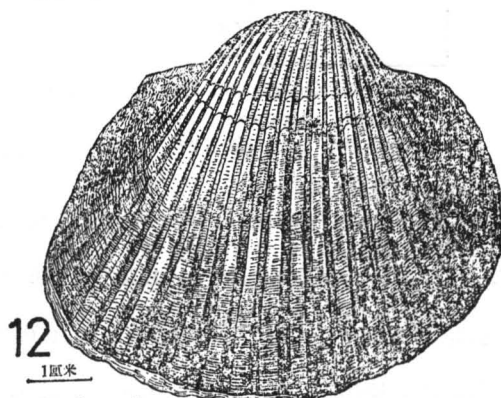


图52 魁 蚶

子 楞 瓦

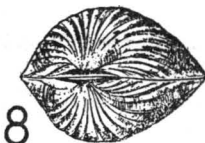
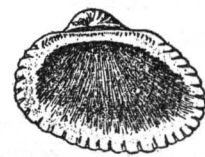
4



生瓦楞



图 3 泥蚶 *Arca granosa* L.



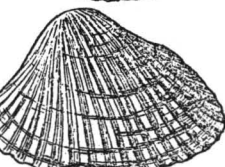
8

图 4 毛蚶 *Arca subcrenata* Lischke



5

图 1297 瓦楞子外形
(仿辽宁药材)



6

图 204 蚶 (蚶科)
Arca spp.



9

图 5 魁蚶 *Arca inflata* Reeve

Figs. 4-12: Wa-leng-zi and Han in the Modern Chinese Literatures

4:中国藥物標本図影, 5:薬材学, 6:北方常用中草药手冊,

7-9:中薬志, 10-12:中国經濟動物誌, 海産軟体動物

馬の爪貝(筑紫), たぶがい(土佐)」の名がある。

現代では、大漢和辞典^{39a)}では魁蛤を「おほはまぐり, 又, あかがひ」とし、魁陸は「あかがひ」とする。新訂和漢薬^{40a)}では、魁蛤は蚌ともいい、ハイガイとアカガイあてる。また国訳本草綱目^{41a)}では、旧註はハイガイをあげ、新註でこれにアカガイとサルボウを追加する。一方、和漢薬名集⁴²⁾では、瓦楞子をあげ、伏貝、灰貝ともいって、ハイガイとし、類縁動物としてサルボウをあげる。なお大和本草の註^{43a)}では、蚌はアカガイ、朗光はサルボウ⁴⁴⁾と考定されている。

中国および日本の文献にみられる魁蛤、瓦楞子および蚌の図を、Figs. 1—12 に示す。

I—5 現生種

現代の中国の文献によると、瓦楞子として用いられるものは Arcidae フネガイ科, Anadardinae リュウキュウサルボウガイ亜科^{47a)}に属する海産二枚貝で、(1) *Scapharca broughtonii* (SCHRENCK, 1867)^{47b, 48a)} (= *Arca inflata* REEVE, 1844, non SCHROETER, 1802) アカガイ^{49a)}, 魁蚌^{25c, 50a)}, (2) *S. subcrenata* (LISCHKE, 1869)^{47c, 48b)} (= *Arca subcrenata* LISCHKE, 1869) サルボウ^{49b)}, 毛蚌^{25b, 50b)}, (3) *Tegillarca granosa* (LINN.

1758)^{47d, 48c)} (= *Arca granosa* LINN. 1758) ハイガイ^{49c)}, 泥蚌^{25a, 50c)} の3種をあげている。

アカガイ(魁蚌)は中国大陆と朝鮮半島の沿岸、および日本では九州から北海道南部にかけて分布し、内湾の潮間帯下から水深 50m の細砂泥底にすむ。

サルボウ(毛蚌)は中国大陆と朝鮮半島の沿岸、および日本では東京湾以南に分布し、内湾の潮間帯下から水深 10m にかけての砂泥底にすむ。藻の中にいるのでモガイ(藻貝)の名もある。韓国^{48b)}では本種を養殖する。

ハイガイ(泥蚌)はインドから西太平洋に広く分布するもので、日本では三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海などで、潮間帯下から水深 10m くらいの泥底にすむ。中国^{50c)}ではこの泥蚌は山東、浙江、福建、広東等の各省で養殖されている。また韓国^{48c)}では本種を一名함, 김(蚌), 복로(伏老), 감요주(江瑤柱), 괴륙(魁陸), 괴함(魁蛤), 파죽자(瓦壘子)などとよんでいる。

この楞蚌, 毛蚌, 泥蚌はともに中国では俗名瓦楞子とよぶこともあり、また薬用にするときは、これらの貝殻を瓦楞子という。

アカガイ, サルボウ, ハイガイの標本の写真を PLATE I に示す。

39) a) 諸橋徹次, “大漢和辞典”, 巻12, 大修館書店, 縮刷版第2刷, 1968, p. 685; b) *ibid.* 巻10, p. 28.

40) a) 赤松金芳, “新訂和漢薬”, 医歯薬出版, 1970, p. 962; b) *ibid.* p. 968.

41) a) 木村康一新註監修, “新註校定国訳本草綱目”, 第11冊, 春陽堂書店, 1976, pp. 106—108; b) *ibid.* p. 96.

42) 木村康一, 木島正夫, 丹信実, “和漢薬名集”廣川書店, 1946, p. 163.

43) a) 貝原益軒撰, 岸田松若, 田中茂穂, 矢野宗幹註, “大和本草”, 第2冊, 有明書房, 再版, 1975, p. 175, 174; b) *ibid.* p. 152; c) *ibid.* p. 169.

44) カルボホと印刷されているが、サルボホの誤植である。

45) a) 明李時珍撰, “本草綱目”, 平装6冊本, 図巻下, 商務印書館, 2版, 1967, 1 (4), p. 67, b) *ibid.* p. 66.

46) a) “本草綱目附図”, 上巻, 介部蚌蛤類, 春陽堂書店, 1979, p. 217; b) *ibid.* p. 216.

47) a) 波部忠重, “日本産軟体動物分類学 二枚貝綱掘足綱”, 図鑑の北隆館, 1977, pp. 36—39; b) *ibid.* p. 36, pl. 8, fig. 2; c) *ibid.* p. 37; d) *ibid.* p. 38, pl. 8, fig. 5; e) *ibid.* p. 178.

48) a) 柳鍾生, “原色韓国貝類図鑑”, 一志社, 1976, p. 110, pl. 32, fig. 10; b) *ibid.* p. 110, pl. 32, figs. 8—9; c) *ibid.* p. 109, pl. 32, figs. 6—7; d) *ibid.* p. 135, pl. 32, figs. 3, 4.

49) a) 岡田要他監修, “新日本動物図鑑”, 中, 北隆館, 初版, 1965, p. 225, No. 837; b) *ibid.* p. 225, No. 840; c) *ibid.* p. 226, No. 841; d) *ibid.* p. 279, No. 1054.

50) a) 張璽, 齊鍾彦, “中国経済動物誌, 海産軟体動物”, 科学出版社, 1962, p. 85, fig. 52; b) *ibid.* p. 84, fig. 51; c) *ibid.* p. 80, fig. 50; d) *ibid.* p. 165, fig. 102.

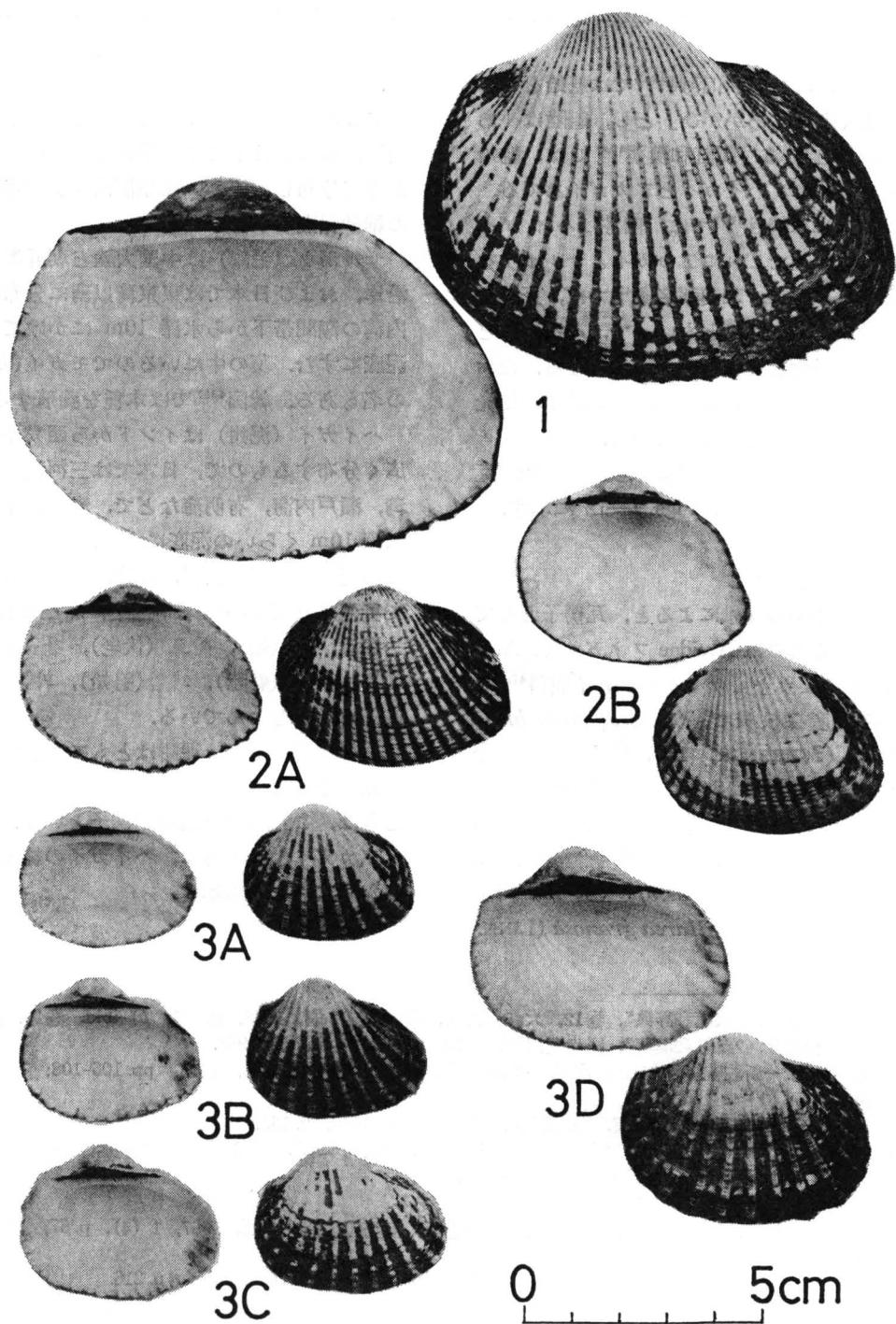


Plate I

- 1: *Scapharca broughtonii* (韩国, 釜山産)
- 2: *S. subcrenata* (A: 韩国, 釜山産, B: 九州, 有明海産)
- 3: *Tegillarca granosa* (A: 台湾, 台北産, B: 台湾, 高雄産, C: 韩国, 釜山産, D: 九州, 有明海産)

I—6 市場品について

台北市内の薬局⁵¹⁾で、血蚶(=海蛤)として1978年に入手した生葉はハイガイであった。これは貝殻を焼いてあり、全体が灰色をおびて殻皮はない。この写真を PLATE II に示す。

II 蛤蜊について

II—1 名称

蛤蜊は陳藏器および日華子の新見として、大観本草^{10c)} 卷22, 虫魚部下品にみえ、李時珍は本草綱目^{12c)}でこの名を「蛤類之利於人

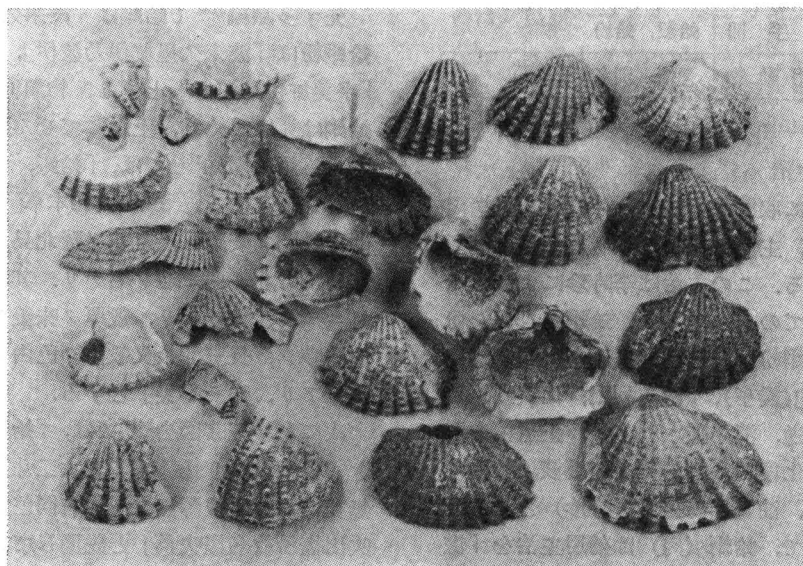
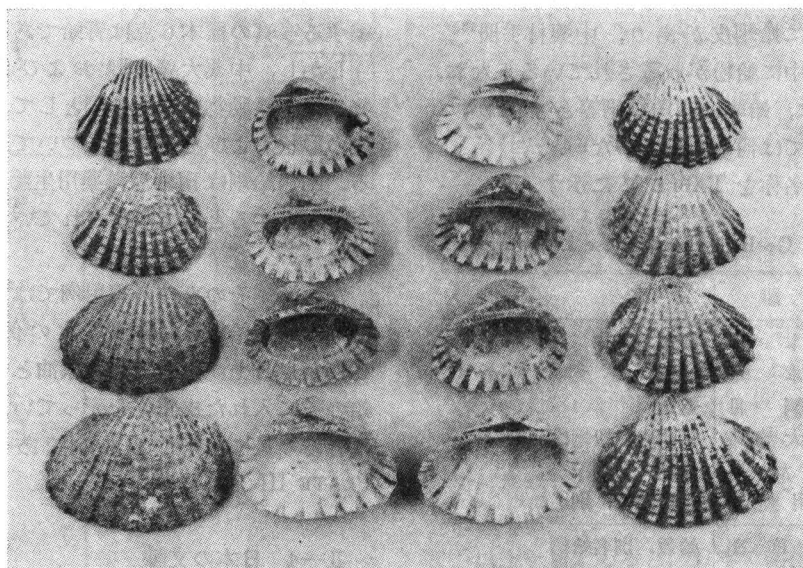


Plate II

Xue-han (台湾, 台北市場品) 上段: 全形, 下段: 破砕品。

51) 台北市乾元参薬行, 1978年5月15日入手。

者故名」と説明している。中国薬学大辞典^{13b)}では、原動物にはふれず、ただ蛤蜊肉と蛤粉(蛤蜊粉)を収載する。その他、蛤蜊という名称は、広西薬用動物^{23b)}では青蛤の別名、山東薬用動物^{24b)}では四角蛤蜊の別名、河北中草药^{17b)}では蛤殻の別名として用いられ、その他、北方常用中草药手冊^{16b)}では、蛤殻(文蛤)の別名に蛤蜊皮があり、中薬材手冊^{18b)}では蛤殻の中に蛤粉が収載されている。なお、辞海^{22b)}では、蛤蜊は四角蛤蜊等とするが、薬用に関しては何もふれていない。

これらの名称を TABLE V に示す。

TABLE V Ge-li in the Chinese Literatures

文 献	名 称
大 観 本 草	蛤蜊
政 和 本 草	蛤蜊
本 草 綱 目	蛤蜊
中国薬学大辞典	蛤蜊肉, 蛤蜊粉, 蛤粉
中 薬 大 辞 典	蛤蜊, 蛤蜊粉
山 東 薬 用 動 物	四角蛤蜊, 別名蛤蜊
河 北 中 草 薬	蛤殻, 別名蛤蜊
北方常用中草药手冊	蛤殻(文蛤), 別名蛤蜊皮
中 薬 材 手 冊	蛤殻, 蛤粉
広 西 薬 用 動 物	青蛤, 別名蛤蜊

II—2 主治

大観本草に収載する蛤蜊は「潤五藏止消渴開胃解酒毒, 主老癬能為寒熱者及婦人血塊煮食之」とする。この主治は李時珍によれば蛤蜊肉についてのものであり、蛤蜊の貝殻を粉末とした蛤蜊粉は「熱痰湿痰, 老痰頑痰, 疝氣白濁帶下」(震亨), 「清熱利湿, 化痰飲, 定喘嗽, 止嘔逆, 消浮腫, 利小便, 止遺精白濁, 心脾疼痛, 化積塊, 解結氣, 消癭核, 散腫毒, 治婦人血病, 油調塗湯火傷」(時珍)とする。中薬大辞典で、蛤蜊(肉)は効用主治を「滋陽, 利水, 化痰, 軟堅。治消渴, 水腫, 痰積, 癰塊, 癭瘤, 崩帶, 痔瘡」, 蛤蜊粉は「清熱, 利湿, 化痰軟堅。治痰飲喘咳, 水氣浮腫, 胃痛嘔逆, 白濁, 崩中, 帶下, 癭瘤, 燙傷」とする。

II—3 形状および分布

蛤蜊については、李時珍が機曰として「生東南海中, 白殻紫唇, 大二三寸者」とあるだけで、現在は、河北中草药と北方常用中草药手冊では文蛤、広西薬用動物では青蛤、中薬材手冊では単に蛤類の外殻とする。READ^{29b)}は蛤蜊は四角蛤蜊とするが、蛤蜊の名称で収載する写真の標本6点は青蛤である。

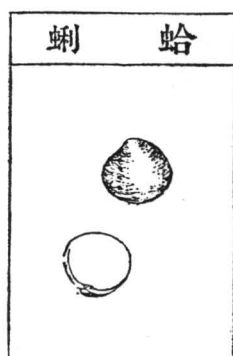
しかし、中薬大辞典^{26d)}および山東薬用動物では、原動物は四角蛤蜊として、この貝の殻の形状およびその分布について説明している。四角蛤蜊は南海海洋薬用生物^{26d)}でも殻を薬用とするとして収載されているが、生薬名はない。

なお蛤蜊そのものの薬用例ではないが、中国で文蛤を蛤蜊と俗称する次の例がある。1978年11月上海市内で、蛤蜊油という名で文蛤の殻に入れた皮膚薬を売っていた。この名は容器の貝に由来するものである。写真を PLATE III 右に示す。

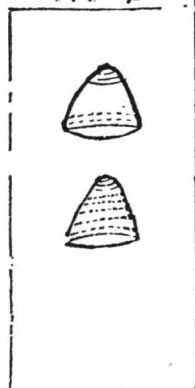
II—4 日本の文献

先ず多識編^{31b)}で蛤蜊は「波末久里」とし、蛤蜊粉は「波末久里加伊乃波伊」, 海蛤粉は「宇美加伊乃波伊」とする。物類称呼^{38b)}でも蛤蜊は「はまぐり, 上総にてぜんなと云」とある。用薬須知^{36b)}では、「蛤蜊, テウセンハマグリ」とする。また大和本草^{35c)}でも蛤蜊は「長門ノ安岡貝, 筑前ノ野北貝是ナルヘシ。安岡, 野北, 何モ地ノ名ナリ。其海中フカキ処ニアリ, 大蛤ナリ, 殻厚ク味美シ, 殻色淡白肉多シ, 長三寸余又殻薄ク色白クシテ大ナル蛤アリ, 味ハ不美」とする。

次に和漢三才図会^{34b)}では、「蛤蜊 しほふき 俗云塩吹」とし、「其大二寸許円灰白色無花文而紫唇殻薄無光滑横有同色文理其肌如吹出塩粉故名塩吹貝」と説明している。また庖厨備用倭名本草^{32b)}では、「蛤蜊ウワカヒ, 多識編ニハマグリ」として、「元升曰, 此ノカヒハ西国ノ海浜沙中ニアル ウバガヒナルヘシ。ウバガヒノナリハ蜆ノ如クニテ大キナリ。其ノ形色生処, 本草ノ注ニノセタルガ如シ」とする。さらに大和本草^{43b)}の諸品図にはシ



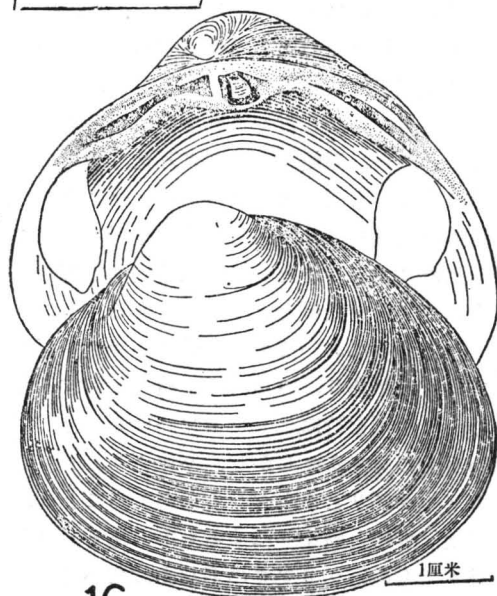
蛸 蛤 13



14



15



16

图 102 四角蛤蜊

Figs. 13-16: Ge-li in the Literatures
13:本草綱目^{45b)}, 14:本草綱目^{46b)}, 15:和漢三才図会, 16:中国経済動物誌, 海産軟体動物

オフキの図があるが、これは金丸によりオニアサリと考定されている。因みに同書本文中の塩吹貝には「殻色淡黒色肉淡紅味不美」とある。

一方、本草綱目啓蒙^{33b)}は蛤蛸として「アマヲブネ(紀州), ヤサラガヒ(遠州荒井), ササラガヒ(同上), シャベリグチ」の名をあげ、アマヲブネについては「紀州海浜ニ多シ, 形ハアサリ介ニ似テ至テ厚ク, 堅ハ四五分許, 横ハ長クシテ七分許, 横条深シ, 内外潔白ニシテ紅紫縁ナリ。(中略)此介皆小クシテ大二三寸ナル者ハ未ダ目撃セズ」と記す。また大和本草のノギタ介, ヤスヲカ介をあげる。さらに「ハマグリ(加州), 朝鮮ハマグリ」も収載する。

現在は大漢和辞典^{39b)}では、蛤蛸は「はまぐり, 又, あさり, しほふき」と説明する。また大和本草の註^{43c)}ではチョウセンハマグリ, 国訳本草綱目^{41b)}の註ではオキシジミとし, 新訂和漢薬^{40b)}でもオキシジミとするが, またシオフキ, ハマグリもあてて。

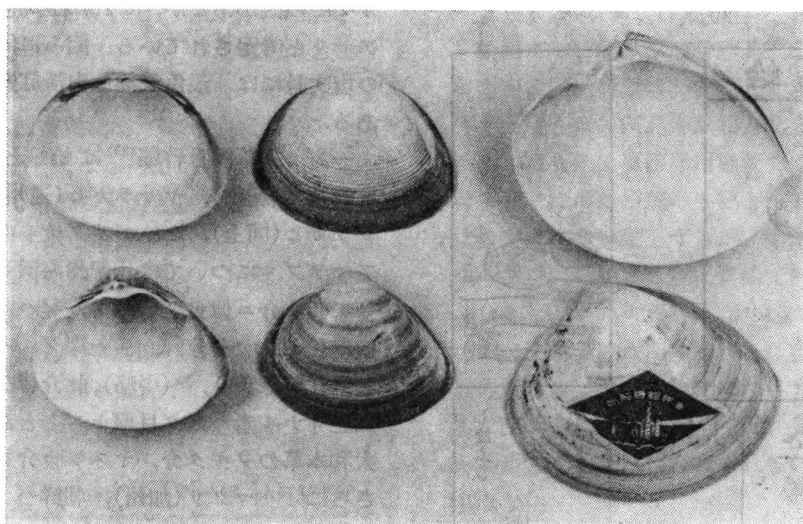
以上をまとめると, 日本で蛤蛸にあてたものは, (1) ハマグリ, チョウセンハマグリ, (2) シオフキガイ, (3) オキシジミの3類となる。本草綱目啓蒙にいうアマヲブネは, その形態の記述からみて, Corbulidae クチベニガイ科のクチベニガイのように思われる。

中国と日本の文献に出る蛤蛸の図を Figs. 13~16 に示す。

II-5 現生種

蛤蛸をはっきり規定しているのは, 中薬大辞典および山東薬用動物の四角蛤蛸である。本種は Mactridae バカガイ科 Mactrinae バカガイ亜科に属する海産二枚貝で *Mactra* (s.s.) *veneriformis* REEVE, 1854^{48d)} (= *M. quadrangularis* DESHAYES, 1853) シオフキガイ^{47e, 49d)}, 四角蛤蛸^{25d, 50d)} で, 中国大陆沿岸, 朝鮮半島から日本にかけて分布し, 潮間帯から水深 20m の細砂泥底にすむ。

シオフキガイの標本の写真を PLATE III 左に示す。



0 5cm

Plate III

Left: *Mactra veneriformis* (九州, 有明海産)

Right: Shell of Ge-li-oil (中国, 上海市場品)

III 考察

魁蛤は最初は海蛤の一名として記載されたが、名医別録から海蛤とは別の種類をさす薬名として用いられてきた。証類本草ではそれらの他にさらに蚌が別条としてあり、重複していたようであるが、李時珍が本草綱目で整理して、魁蛤＝瓦墾子＝蚌とした。勿論これらの中には屋根の瓦と同じ形を殻表にもつとして、アカガイ、サルボウ、ハイガイが含まれている。それは現在では魁蚌、毛蚌、泥蚌として識別され、俗名としてまとめて瓦楞子とよんだり、これらの貝殻を薬用にするとき、区別せずに瓦楞子といったりする。さらにこれらの種類は食用として経済的な価値があり、中国では泥蚌は広東、福建、浙江、山東省等で人工養殖されている。

海蛤は本来は海岸でさらされた多種類の貝殻の総称であるから、この中に瓦楞子が混入してもさしつかえはない。しかしこの類だけをあつめて薬用に供するときは、海蛤の名でない方が望ましい。台北市内ではハイガイからなる市場品に血蚌の名称を用いている。こ

のように魁蛤は瓦楞子あるいは蚌として、海蛤とは区別されねばならない。

蛤蜊は魁蛤に比べて複雑である。蛤蜊には蛤蜊肉と蛤蜊粉の両方の使い方があり、蛤蜊粉は現在では蛤蜊の貝殻を焼いて粉にしたものである。しかし古くこれを海蛤粉ともいったことから、海蛤とも混同された。さらに海蛤は文蛤とも同じように用いられたことから、蛤蜊の原動物には現在でも文蛤や青蛤があてられたりする。また一般には蛤蜊油の例のように、文蛤を蛤蜊とよぶこともある。

一方日本においても、蛤蜊にハマグリをあてるものがあり、さらには文蛤と区別するためか、蛤蜊を特にチョウセンハマグリとしているものもある。しかし、ハマグリ、チョウセンハマグリとオキシジミをあてることは、文蛤、青蛤と軌を一にするものである。また日本でも一応シオフキの名をあげているものもあるが、その内容を検討すると、大和本草のシオフキは図からわかるように *Mactra* でなく、オニアサリに合致するし、和漢三才図会のシオフキも「其肌如吹出塩粉」という記述からみて *Mactra* ではないようである。た

だ庖厨備用倭名本草のウバガイが *Macra* のシオフキガイと思われる。

つまり蛤蜊は海蛤，文蛤，青蛤と混同されたが，正しくは四角蛤蜊，シオフキガイに由来するものである。

謝辞

本研究にあたり，文献および標本についてご教示いただいた波部忠重氏をはじめ，各種標本を分与された桜井欽一，山本愛三，松本達也の各氏に深謝する。

Summary

As a synonym of Hai-ge 海蛤，Kui-ge 魁蛤 was first described in “Shen Nong Ben Cao Jing” 神農本草經. The same Kui-ge was also the standard name arranged on “Ming Yi Bie Lu” 名醫別錄 as different drugs from Hai-ge. The following historical herbals such as “Xin Xiu Ben Cao” 新修本草 and “Da Guan Ben Cao” 大觀本草 had these two names for a long time. In addition to them，Han 蚌 was newly described in “Zheng Lei Beh Cao” 証類本草.

Kui-ge as the standard name and Han were same materials prepared from the bivalves belonging to the subfamily Anadarinae. They are now calling Wa-leng-zi 瓦楞子 in China and treating with the specific names Kui-han 魁蚌，Mao-han 毛蚌 and Ni-han 泥蚌. Their scientific names are *Scapharca brouhgtonii* (= *Arca inflata*), *S. subcrenata* and *Tegillareca granosa* respectively. Accordingly real Kui-ge was different from Hai-ge, materials of many kinds of seashells, and Wen-ge 文蛤，*Meretrix*, Veneridae. The specimens obtained at Taibei city in 1978 were shells of Ni-han and named Xue-han 血蚌.

On the other hand，Ge-li 蛤蜊 was complicated with Hai-ge or Wen-ge in old days. This has been thought to be the same one to Wen-ge and Qing-ge 青蛤 as the specific names of bivalves. But they now treat the shells of Si-jiao-ge-li 四角蛤蜊，*Macra veneriformis*, Mactrinae, for real materials in China.

Vol. 14, No. 2 の「貝類生薬の本草学的研究
(第2報) 海蛤・文蛤について」の正誤表

ペ	ー	ジ	誤	正
p. 61,	TABLE	VII, 8	角 倍	肚 倍
"	"	9	肚 倍	角 倍
p. 63,	Plate	II, 図の No.	8	9
"	"	"	9	8

中国の宋、金、元、明、清代および中華民国 年代における爆竹、爆仗、烟火

岡 田 登

Chinese Bamboo-cracker, Bamboo-stick and Fire Works in Song,
Jin, Yuan, Ming, Qing Dynasty and Era of the People's
Republic of China.

Noboru OKADA

緒言

既報¹⁾²⁾³⁾のごとく中国においては古くより竹を燃やす爆竹が行なわれ、宋代においては黒色火薬を用いた爆竹がつくられ、爆仗、烟火なども行なわれた。本稿においては中国における宋代、金代、元代、明代、清代および中華民国年代における爆竹、爆仗、烟火などについてを中国の原典よりその一端を明らかにしたものである。

宋代における爆竹、爆仗、烟火

宋代における爆竹、爆仗、烟火についてはその多くを既に報告した。

雞肋編⁴⁾には除夜の爆竹について次のように記されている。「澧州（現、湖南省澧県）、除夜に家家、爆竹し、毎に声^{こゑ}を発し、すなわち市人、群兒、環呼して大熟（豊年）という。是のごときは旦に達し、その節物（四季おりおりの品）を送り、大竹、兩竿をもって、これに随い、広南にてはすなわち万歳を叱ぶ」とある。また⁵⁾「広南（中略）歳除、爆竹し、軍民は環聚し、大いに万歳を呼ぶ」とあ

る。これらの爆竹は竹を燃やした爆竹と思われる。

淳熙三山志⁶⁾の歳除には火爆として荆楚歳時記を引用し、つづいて「今、州人は除夕に竹をもって火に著き庭中に焼爆し、兒童は街に当り（街において）焼爆し、相望み、戯呼し旦に達し、これを焼火爆と謂う。張丞相浚（丞相の張浚）帥たるの日、除夕に莆（現、福建省莆田市）人の鄭樵（字は漁仲、1104~1160）、郡中に客し、与に火爆を觀る。（中略）千門の竹爆は団楽を競い、焼成する焰焰、丹砂の塊（火薬を指したものと思われる）あり」とある。この焼火爆は焚き火の中へ竹を燃やした爆竹であり、丹砂は通常、硫化水銀を指すものであるが、ここでは火薬を指しているのではなかろうか。それゆえここに記されている爆竹は竹を燃やした爆竹と、火薬を用いた爆竹を記したものと思われる。

趙師俠（使）のあらわした担菴詩⁷⁾には、鷓鴣天（歌曲の名）が記され、「爆竹の声中、歳を又除く。頓みに和氣（おだやかな気分）を回らし、寰区（広い境界）に満つ（以下略）」とある。この爆竹は竹を燃やしたのか火薬

1) 岡田登；薬史学雑誌，13 (2)，45，1978.

2) 岡田登；薬史学雑誌，14 (2)，81，1979.

3) 岡田登；薬史学雑誌，15 (1)，17，1980.

4) 莊季裕撰；雞肋編，卷上，1139.

5) 同上，五朝紀事，五朝小説，宋人百家小説，說郛所収の雞肋編.

6) 梁克家撰；淳熙三山志，卷四十，1182.

7) 趙師俠撰；担菴詞，1200頃.

を用いた爆竹かは明らかではない。

歳時広記⁸⁾には、燎爆竹として李旼該聞集を引用し、既報の爆竹が祟をなくすことを述べている。

陶朱公致富全書(註1)には「除夕、焼盆、爆竹し、与に田蠶を照らし火色を見る。同じく是の夜、安静を取りて吉となす」とある。

また宋代に書かれた中国の地方志には、除夕あるいは元旦に爆竹などを行なうことが記されている。

金、元代における爆竹、爆仗、烟火

金代における爆竹については、^{れんけん}鄭樵の詞⁹⁾、除夜には「殊方(他国)の節物(前述)は老いて驚くに堪る。病んでは怯ゆ、諸隣の爆竹の声(以下略)」とあり、金代においても爆竹が用いられたことが知られる。

元代における爆仗、烟火については次の^{しん}真臘風土記¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾にみられる。これはカンボジアのアンコールにおける記録であって、爆仗、烟火については「正朔时序」として次のように記されている。「(前略)国宮(国の宮殿)の前にあたり、一大棚を縛す。上に千余人を容れるべし、尽く燈毬(丸形の燈籠)花朵(花の咲いている枝)の属を掛く。その対岸の遠く二十丈を離れるの地に、すなわち木をもって接続し、縛りて高棚を成す。塔を造ること撲竿の状のごとし。高さ二十余丈ばかり。夜毎、三〜四座、あるいは五〜六座を設く。烟火、爆仗をその上に装す。これ皆、諸属群および諸府第、あたいを認む。夜に遇えば、すなわち国主の出でて観んことを請う。烟火、爆仗を点放するに、火、百里の外といえども、皆これを見る。爆仗はその大きさ砲のごとし。声、一城を震わす。その官属、貴戚(公

族たち)は人ごとに分かつに、巨燭の檳榔(檳榔でつくった燭台、あるいは巨燭か)をもってす。費やすところ甚だおおし。国主、亦、奉使に請いてこれを観せしむ」とある。

この烟火、爆仗をつくるのに用いた原料の硫黄、硝石についてはこの地では産出しない。同書の「唐貨を得んと欲す」と記された項には、硝石、硫黄について記されており、中国より移入したものと思われる。

^{てうもうふ}趙孟頫(1254~1322)のあらわした松雪斎詩集¹³⁾には「烟火を放つ者に贈る」詩が次のように記されている。「人間(俗界)の巧芸(花火)は天工(天の星)を奪い(すぐれている)、鍊藥(花火の火薬)、燈を燃やし、あかるきこと昼に同じ。(花火は)柳絮(柳の花の白い絲)は飛び残り(るごとく燃え)、地に鋪きて白く、(花火の燃える様子は)桃花、落ちつくして、階に満ちて紅し。^{ふんふん}紛紛(花火の火の粉が乱れるさま)、燦爛として、星の^お隕つるがごとし(流れ星のようである)。燿燿(原文、燿燿、光りかがやく)、喧^{けんかい}喧(鳴りひびき)、火攻(戦いのときの火薬兵器)に似る。(以下略)」とある。

当時の火薬兵器は花火と同じような燃焼、爆発をおこし、光と音を発したことを記したものである。

明代における爆竹、爆仗、烟火

明代における爆竹、爆仗、烟火についてはその一部は既に報告した。

楊維禎¹⁴⁾(1296~1370)のあらわした詩には「四馬挾彈図」が記され、「君王は手に流星弾を挟む。打つなかれ、慈烏(からす)、樹をめぐりて飛ぶを」とある。

流星については既報の武林旧事、および武

8) 陳元靚撰; 歳時広記, 卷四十, ~1279.

註1) 著者名、成立年は不明、内閣文庫本による。陶朱新録(宋、馬純撰)には該当文の記載はみられなかった。

9) 陳夢雷編; 曆象彙集歳功典, 第二十六卷(古今圖書集成), 1725. による。鄭樵の著作に 坡軒集があるが、当書は日本国内には現存しないものと思われる。

10) 周達観撰; 真臘風土記, 1296~1300.

11) 金榮華校注; 真臘風土記校注, 正中書局, 1977.

12) 三宅一郎, 中村徹夫; 考証真臘風土記, 同朋舎, 1980.

13) 趙孟頫撰; 松雪斎詩集, 卷四, 1254~1322.

14) 楊維禎撰; 楊鉄崖先生詩集, 庚, 1296~1370.

林旧事を引用した通俗編には流星が記され、また既報のごとく流星は張貴の軍が用いたことが知られ、後述の菽園雜記には流星を作るのに紙を用いることが記され、後述の火戯略にも流星が記されており、後世のわが国においては流星は花火としてその名を知られるが、当時の流星はどのような構造のものであるかは知るよしもない。

陸容¹⁵⁾ (1436~1499) のあらわした菽園雜記には爆仗と烟火について次のように記されている。「(前略) 永楽 (1403~1424) 宣德 (1426~1435) の間、鼇山 (燈籠をかざりつけた山車)、烟火の費 (費用) はまた故紙 (古い紙) を兼ね用い、後來 (その後) は復た然らざるなり (費用を節約するのに古い紙を用いたが、その後は古い紙を用いなくなった)。成化 (1465~1487) の間、流星、爆仗等、一切作るに撈紙 (よくすき返した高価な紙と推定) を取りてこれをつくる。その費 (費用)、計るに勝うべけんや (その費用は極めて高価となった)」とあり、当時は爆仗も流星も紙を用いて作ったことが知られる。

大明一統賦¹⁶⁾には爆竹について次のように記されている。「除日 (中略)、爆竹、火炬は田を照らし、門神を易え、桃符を換う」とあり、月令広義の十二月令に引用されている。

古今事物考¹⁷⁾には爆竹として神異経を引用し、さらに「歳時記 (荆楚歳時記と推定) にいわく、爆竹、燃草は庭燎に起る」とある。

楊循吉 (1456~1544) の詩、除夜雜詠¹⁸⁾には、「火戯 (原文、戯火) に梨筒あり」とある。この梨筒はいかなるものであるかは明らかではないが、既報の経国雄略に記載された梨火槍に類する花火、すなわち筒の中へ黒色火薬をつめたものではなからうか。

唐錦 (1475~1554) のあらわした夢余録¹⁹⁾には「古人は爆竹を必ず元旦、雞鳴の時に

いてす。今人は易えて除夜をもつてす。古意を失するに似たり」とある。

張時徹 (1504~?) のあらわした芝園集²⁰⁾には「陳都の閭宅に烟火を看る」として次の詩が記されている。「正月の初旬、(中略) 將軍の煙火、夜、偏に奇なり。(以下は花火の形容と思われる) 層層たる (重なっている様子) 島嶼 (大小の島)、神仙 (仙人) 見われ、燦燦たる雲霄 (天空)、星斗 (星や北斗七星) 垂る。宝塔、峻嶒 (山の高くけわしく重なるさま) として、紫峯 (仙人の山) に跨り。青天、削出す、金の芙蓉 (蓮の花) あり。芳蘭 (かんばしい蘭)、日に映じて瓊瑤 (美しい玉) の碧あり。菡萏 (蓮の花)、波を凌ぎて、瑪瑙は紅し。蠟炬の光中に戦馬はいな鳴き。奔ること飛電のごとく、突として鯨のごとし。戈予 (ほこ) 寒帯す、陰山の雪。旗甲、晴輝す、瀚海の星。野鴿は隻飛し、乍ち没せんと欲し。枝を銜みて喜鵲は喳喳 (鳴きごえ)、発す。芍薬、葡萄は翠屏 (みどりの屏風) に懸る。珊瑚、宝貝は明月に流る。空中に捧出す、百絲の燈。神女の粧新、五彩、あきらかなり。真人 (仙人) は蛟 (みづち) を斬りて長劍を動ず。狂客は簫を吹きて、洞庭を過る。翩翩 (みがるに飛ぶ) 舞蝶は、穿花 (花の咲いている中を過ぎること) に戯むる。海上の樓台は赤霞 (夕やけ) を散ず。須臾にして錦繡 (あやにしき) は被いて地に満つ。明珠 (ひかるたま)、斗大 (一斗ますほどの大きさ) にして、紛たること (乱れる様子)、麻のごとし (数が多い)。城中の小児は齊しく拍手す。声声 (口口に)、好を道う (いいぞ、いいぞと)、雷吼のごとし。擊鼓、彈箏は時に喧を転ず。河漢 (天の河)、低回 (さまよい) し、朱牖 (かきね) に掛る。(以下略)」とある。

この表現よりすればここに記された花火はかなり高度の花火が行なわれたものと思われ

15) 陸容撰; 菽園雜記, 卷十二, 1436~1499.

16) 莫旦撰; 大明一統賦, 下卷, 1537.

17) 王三聘撰; 古今事物考, 卷一, 1538.

18) 楊循吉撰; 石倉十二代詩選, 卷五十三, 1456~1544.

19) 唐錦撰; 夢余録, 1475~1554.

20) 張時徹撰; 芝園集, 卷八, 1539.

る。

七修類稿²¹⁾には「除夕元旦の詞」が次のように記されている。「痒彦（しょうげん 学びやの秀才）沈明德宣（名は沈宣，字は明德と思われる）（中略）除夕に云う。鑼鼓，児童の声は耳傍に聒し，早く門を闔し，新簾子を掛起（たら）し，炮仗は街に満ち，（中略）元旦に云う，灶神（かまどの神）に接し得て，天はいまだ暁けずに，炮仗は喧喧として開門の早きを催要す（以下略）」とある。この炮仗については辞海²²⁾および中華児童百科全書には爆竹であることが記されている。

酌中志²³⁾は万曆（1573～1620），天啓（1621～1627）年間の宮中における行事を記したものであるが，花火については次のように記されている。「十二月三十日，歳暮に歳を守り，乾清宮（北京の宮殿の名）の丹墀（庭園）内に二十四日より起りて，次年正月十七日に至り，ただ毎日昼間に花炮を放つ。大風に遇いて暫く，ただ半日とし，一日その鼇山，燈扎，烟火を安んじ，聖駕（天子）は陸座（座につく）するときを伺いて花炮あり。聖駕は宮にかえるとき，亦，大花炮を放つ（以下略）」とある。

ここに記された花炮，大花炮は通常花火，あるいは烟火を指す。

また（古今）事物原始²⁴⁾には火爆として，神異経を引用し，さらに「その鬼は爆竹の声を畏る。今人の火爆を放つはすなわち故事にしたがう」とある。また爆竹を放つとして「今，除夜に爆仗を放ち，もって爆竹に代うはその遺事にしたがう」とある。

また多くの地方志には除夕あるいは元旦に爆竹，あるいは爆仗，烟火などを行なうことが記されている。

清代における爆竹，爆仗，烟火

清代における爆竹，爆仗についてはその一部は既に報告した。

錢謙益（1582～1664）のあらわした牧齋初学集²⁵⁾には辛未除夕の詩が記され，「懶うく聴く，比隣に喧する爆竹を」とある。また辛巳除夕の詩が記され，「愁心，爆竹は儼をまさに去らんとす」とある。また壬午除夕の詩には「爆竹の声中，伝火急なり」とある。

陳維崧（1625～1682）のあらわした陳迦陵文集²⁷⁾には「玉峯徐健庵の太史宅に讌（酒もりをする）し，歌舞，烟火は甚だ盛なり」として次のように記されている。「（前略）場園（はたけ）を看るに竿を交えて，火蛾（花火の火の粉），無数を放出す。（花火の状況は）髻髻（ほうかつ ぼんやりとして）として蜃楼，海門の市あり。西極（西の最はて）の^{しゆんけい} 爰猊（獅子），偏へに怒り，更に炮打襄陽（花火の名称，後述）あり（以下略）」とある。

古今圖書集成に所収の歳功典⁹⁾には，地方志を引用し，各地方における元旦の行事と爆竹などが記されている。また除夕に爆竹を行なうことが記されている。各地において爆竹などとともに各種の行事が行なわれる。

事物原会²⁸⁾は既報の続博物志，神異経を引用し，さらに「除夕に爆竹は山臊を避けるゆえんなり。後人は紙を束ねこれをつくり，納めるに硝，礮をもってす」とある。また爆仗については既報の物原を引用し，爆仗を魏の馬鈞がつくり，隋の煬帝は火薬を用いて雑戯をしたことを述べているが，この爆仗以下の説明は既報のごとく誤りであろうと思われる。

厲鶚（^{れいあく} 1692～1752）のあらわした樊榭山房詩集²⁶⁾には，庚午除夕の詩が記され，「夜半，

21) 郎瑛撰；七修類稿，卷三十，1522～1566。

22) 辞海編集委員会編；辞海，中華書局（香港），1965。

23) 劉若愚撰；酌中志，卷三十，1628～1644。

24) 徐炬撰；（古今）事物原始，～1661。

25) 錢謙益撰；牧齋初学集，1582～1664。

26) 前野直彬；宋，元，明，清詩集，平凡社，1973。

27) 陳維崧撰；陳迦陵文集，卷二十七，～1682。

28) 汪汲撰；事物原会，卷三十七，1796。

29) 厲鶚撰；樊榭山房詩集，卷八，～1682。

眠りなく、爆竹を聴く」とある。

袁枚²⁶⁾³⁰⁾ (1716~1799) のあらわした小倉山房詩集には、除夕の詩が記され、「年年、除夕、側耳に聴く。爆竹の声声、直ちに明に至り」とある。

遵生八牋³¹⁾には「除夕、呉山に登り松盆を見る」として次のように記されている。「除夕、惟、杭（杭州、現、浙江省杭県）城の居民、家戸は柴を架し、燎を燐き、火光は天を燭し、鼓を搗ち、金（楽器、鐘の類）を鳴らし、炮、起火を放ち、これを松盆という。無論、他の処に敵うなく、すなわち杭の郷村、亦これに勝るなく、斯の時、幽趣（奥ゆかしいおもむき）を抱くもの、呉山に登り、高く曠ゆる南北に就きてこれを望む。紅光、万道、炎焰として火雲あり。巷巷に分岐する光は界隔をつくり、耳を聳し、声喧（喧）震騰す。遠近に目触するは、星丸（花火の火の玉か）錯して上下に落つ（以下略）」とある。

また清代に書かれた多くの地方志には、除夕、元旦に爆竹などを行なったとの記録がみられる。

火戯略について

清代における烟火製法の概要については、本草綱目拾遺の著者である趙学敏があらわした火戯略³²⁾ (1753) において知ることが出来る。この著作は硝石、硫黄、木炭とともに種種な烟火について記されており、Davis³³⁾ により英文に要約され、また中国化学史にも紹介されている。

当時、烟火を作るのに用いた化学薬品は、硝石、硫黄、木炭の他に、鉄粉、雄黄、阜角膏、芙蓉汁（蓮の花の汁）、銅青、鉛粉、雄精、松煤、青黛、硃砂、膩粉、瀝青、胆礬、砒石、石腦油、樟腦、地洩、黄丹、密陀僧、黒錫灰、古青錢、鉄華粉、爐甘石、不灰木、

石脂膏、輕粉、鐘乳、石炭、礬石、黄礬、雷墨、硃砂、蓬砂、銅緑などがある。

この火戯略に記された花火の製法はビザンチウム（コンスタンチノーブル、イスタンブール）の商業交通路を経てヨーロッパへ伝わったとの推定を Davis らはしている。Ruggieri³⁴⁾ の著書にこれらの薬品が用いられていることはこれを裏付けるものであろう。それゆえこの趙学敏のあらわした火戯略はヨーロッパの花火製造の発展にも大きく寄与したものである。

清代におけるヨーロッパ人の記録

John Bell (1691~1780) はスコットランドの医師であり、且つ旅行家であるが、ロシアのペテルスブルグ（現、レーニングラード）よりシベリア、蒙古を経て中国に入り1718年より4年間を中国で過した。この時の旅行記は Pinkerton の *voyages and travels*³⁵⁾ (1811) に記されており、当時の中国の花火を次のように記している。

Besides these, there were exhibited, on this occasion, many other ingenious designs of fire-works, which far surpassed any thing of the kind I ever saw, though I have been present at performances of this nature exhibited at St. Petersburg by the artists in Europe. Besides the art displayed in the contrivance and figure, these works furnished, in particular, a wonderful variety of most beautiful colours, far exceeding my ability to describe. I must confess they far outdid my expectations, and even common fame, which seldom lessens things of this nature.

The following day, the Emperor gave the ambassador a private audience, and

30) 袁枚撰；小倉山房詩集，卷二十四，~1797。

31) 高濂撰；遵生八牋，卷六，1832。

32) 趙学敏撰；火戯略，1753。

33) Davis, T. L.; Proceedings of American Academy of Arts and Sciences, 75(4), 95~107, 1943.

34) Ruggieri, C. F.; Elemens de Pyrotechnie, (Paris) 1801.

35) John, Bell, Pinkerton, J.; Voyages and Travels., Vol. 7, Longmann Hurst. (Lond.) 1811.

enquired how he liked the diversions and fire-works. On this occasion, the Emperor repeated what has been already observed concerning the antiquity of illuminations composed of gunpowder; and added, that, although fire-works had been known in China for more than two thousand years, he himself had many improvement upon them, and brought them to their present perfection.

当時は既にロシアのペテルスブルグでヨーロッパの花火が行なわれ、Bell はその花火をみて、中国の花火をヨーロッパの花火と比較して中国の花火がすぐれているとしている。

また John Francis Davis は香港の総督として中国に滞在し、当時の模様は1836年に書かれた *The Chinese*³⁶⁾ に記され、黒色火薬は中国において2000年も前からあったことが述べられ、紙、インク、印刷術、羅針盤などは中国に古くよりあったことが記され、新年における爆竹について *feu de joie* (喜びの火) として次のように記されている。

On the night of the last day of the old year, everybody sits up, and at the moment of midnight commences an interminable *feu de joie* of crackers strung together. Indeed, the consumption of this noisy species of firework is so enormous that the air becomes absolutely charged with nitre; and a governor of Canton once in vain endeavoured to suppress it, on the ground of the und ue wastefulness of the practice, though it probably contributes to the healthiness of Chinese towns.

すなわち黒色火薬が分解したとき窒素(註2)を生じ、このため空中の窒素が増加し、町の中の人々の健康を気づかしたものである。後世、ハーバー・ボッシュが空中窒素を

固定し、アンモニアの合成をしたとき(1908)、空中の酸素が増加するのではないかと懸念したことを考えれば誠に興味ある記述である。

民国年代における爆竹、爆仗、烟火

清俚類鈔³⁷⁾には爆竹と烟火が次のように記されている。

爆竹については「古の時に火に竹を著くをもって畢剝(爆発音がおこり)声あり。これを爆竹と謂う。相伝え鬼を駆すをなすにこれを用う。後世、紙をもって火薬を裹み、爆火は声を発す。亦、爆竹と称す。漢口、製するところの者を最良となす」とある。

烟火としては、i) 「烟火は火硝(硝石)をもって、他の薬物に雑へて燃焼し、変幻、燦爛の状を現わす者なり。その火力は噴射せば、能く花、草、蘭、竹などの形をつくる。あるいは紙をもって種々の人物を製し、その中に穿插(さしこむ)し、靈巧(不思議なたくみ)を極む。あるいは薬をもって火焰を発し、各種の顔色(色彩)を幻成す。各省に多くこれあり。尤も広東の潮州(現、広東省潮安県)、江蘇の揚州(現、江蘇省江都県)に製する所のものをもって最も著名となす。その値はまた賁^{はか}られず(はかり知れない)」とある。

ii) 「乾隆(1736~1795)の時に秦淮(川の名)画舫(遊覧のさいに乗る舟)(註3)に競って煙火を放ち、河上の大観をつくる。士女(男も女も)は巷を空にして出づ。水鴨、水鼠、満天星、遍地錦、全賤銀台、賽月明、風車、滴滴金(以上は花火の名称と思われる)なるものあり。その名を一にせず、その巧を一にせず、遊ぶ者(観客)は試みに、紅板(赤い板)の橋欄(橋のらんかん)に凭^{ひよう}(もたれかかり)し、東水関、および月牙池の前にて望む。燈影は天を燭し、爆音は水を潑^はねて、昇平(天下泰平)の景象(見事な様子)は誠

36) John, Francis, Davis.; *The Chinese*, Charles Knight, (Lond.) 1836.

註2) nitre は現在は硝石を指すものであるが, *Shorter Oxford English Dictionary*, 3rd. ed. (Oxford) 1933. によれば, 19世紀においては A supposed nitrous element in the air or in plants. を指す。

37) 徐珂輯; 清俚類鈔, 物品類, 1917.

註3) 捧花樓撰; 秦淮画舫録, 1817. にはこれについての記載はみられなかった。

に図画の能く画く所に非ざるなり」とある。

iii) 「咸豊(1851～1861)朝、毎歳、上元の夕に」として既報の簷曝雜記とほぼ同様のことが記されている。

iv) 「光緒(1875～1908)時に内務府の營造司(官名、家屋を設けることを掌どる)に由り、廠(工場)を設け、新奇の烟火を放つ。元宵の前数日に、小工(人夫)数十(人)を率い、紅槓(赤い棒)、黄紵(黄色の紐)を用い拴擡(しばってかつぎ)し、菜市口より宣武門に進み、途(道)に絡繹(往来につづいて絶え間ない)す。五彩(五色)の鳳凰、孔雀、錦雞、白鶴に像形する(形をつくる)。並びに松柏(松と竹)を用い、大小の獅子、虎、豹、麒麟の類を繋ねて、燃し放すとき、空中に停頓(頓座し)し、変換(変化)して花を成す。此れ即ち、考欽(皇)后の各国の公使夫人に請いて、同じく観るの烟火なり」とある。

新年風俗志³⁸⁾には中国各地における新年の行事が記されており、その行事のなかで爆竹、鞭炮、鞭爆、焰火、花筒、煙火などがあげられるとある。用いる爆竹などはその地方独特の行事とともに、用いる爆竹が異なることが記されている。

大正末期の北京のことを記した北京風俗図譜³⁹⁾によれば、正月には爆竹をし、二踢脚、掛鞭をあげ、正月13日には宮中で宴会をし花火をあげ、また年末の12月23日には鞭炮が放たれるとある。

第2次世界大戦中の昭和17年に書かれた支那物産総覧⁴⁰⁾によれば、中国の爆竹、花火などの産地とその年間の生産量などは次のようである。

これが書かれたのが戦事中のことであるのでその正確さは知るよしもないが、当時の中国の爆竹などの生産地を知ることが出来る。

現在、中国ではどのような爆竹、爆仗、烟火が用いられているのであろうか。

省 名	県 市 名	種 類	製造高/年
江西省	宜春	花 爆	20,000箱
福建省	長汀	鞭 炮	100,000元
広東省	広州市	爆 竹	915,713元
	南海	爆 竹	7,000箱
	東莞(石龍)	爆 竹	7,000箱
		煙 火	200箱
	高要(広利)	爆 竹	4,000箱
広西省	邕寧	潮爆竹	2,000斤
湖南省	瀏陽	編 爆	40,000箱
雲南省	龍陵	爆 竹	1,000駄
河北省	故城(鄭家口)	編 炮	40,000,000個
	霸県	花 炮	2,000個
山西省	太原	紙 炮	1,000,000個

続北京の市民⁴¹⁾には中国の爆竹などについての説明があり、河北省南部の東鹿が爆竹の生産地として有名で、広西省、福建省も有名である。麻雷子、五鬼鬧判、燈、花、炮、花盒子、炮打襄陽城などにかなり詳しい説明がある。また子供の花火として滴滴金、隸穿牡丹、起花などがあるといわれる。

また中華児童百科全書によれば次のようである。爆竹のことは炮仗(あるいは炮竹ともいわれるという)ともいい、中国の南方地方では鞭炮(あるいは鞭爆ともいわれ、小さい数多くの爆竹を糸で連ねてぶら下げたもの)は湖南省瀏陽のものが、北方の鞭炮は河北省東鹿のものが有名である。花盒子(盒子)は広州のものが有名である。その他中国独特の花火として、麻雷子、二踢脚、天響音、炮打燈、水鴛鴦、金盤落月、九龍獸瑞、飛天十響、起火、冲天炮、大平花、大金錢、小金錢、五鬼鬧判、炮打襄陽城、九連燈、黄煙炮、地老鼠などがある。そしてこれらの爆竹、烟火などは祭礼、結婚、葬式、開店、祝典などに用いられるという。

中国の火薬史について

日本における中国の火薬史の研究について

38) 婁子匡編; 新年風俗志, 商務印書館(台湾, 人人文庫), 1933.

39) 内田道夫編; 北京風俗図譜(I), 平凡社(東洋文庫), 1964.

40) 山崎百治; 支那物産総覧, 栗田書店, 1942.

41) 羅信耀著, 式場隆三郎訳; 続北京の市民, 文芸春秋社, 1943.

は、古く桑原隲蔵博士は東洋人の3大発明の1つに火薬をあげ(1914)⁴²⁾しており、矢野仁一博士⁴³⁾、黒田源次博士⁴⁴⁾、慶大 和田博徳教授⁴⁵⁾らの研究があり、また貝塚茂樹博士⁴⁶⁾、藪内清博士⁴⁷⁾らの紹介もあり、また京大 吉田光邦教授による火薬の起源⁴⁸⁾などに関する紹介、あるいは宋代の軍事技術などに関する研究⁴⁹⁾もあり、また火炮に関しては有馬博士⁵⁰⁾の研究があるが、いづれもその多くは火薬兵器に関するものである。

英文のものとしては DAVIS ら⁵¹⁾は中国の火薬兵器を紹介しており、またニーダムの著書、「中国の科学と文明」⁵²⁾⁵³⁾においては火薬に関して記載予定であるといわれる。

最近の中国においては火薬を中国の四大発明の1つにあげ、火薬を論じている書および化学史書などに火薬史^{54)~55)}について記されているものも少なくない。

結 語

焚き火の中へ竹を燃やす爆竹は黒色火薬を用いた爆竹、爆仗、烟火へと発展し、中国においてはその起源は鬼を追うためのもの

であったが、烟火へと発展するとともに、その多くは娯楽に用いられ、あるいは開運としての爆竹が用いられ、結婚、葬儀、祭礼などに多く用いられている。

一方、日本においては既報のごとく、初期には火薬を用いた爆竹が行なわれ(1581)だが、以後においては爆竹は殆んど行なわれず、[とんど]あるいは[左義長]としての行事が行なわれ今日に至っているが、これは単に竹を燃やすものである。

花火としての名称は中国においては既報のごとく経国雄略(1525)においてみられるのみであり、一方、日本においては前述の爆竹が行なわれたが、天正日記⁶⁰⁾に記されているところによると、天正十七年(1588)七月七日の項に「たいとうちん(大唐人)、三人参(り)、はなひ(花火)申候」とあるのが最古の記録であろう。

中国においては現在においても年末、年始、あるいは祭礼に爆竹を主とした花火が行なわれ、日本では神社のお祭り、あるいは夏祭りに花火が行なわれておりその発展様式を大いに異にした。

42) 桑原隲蔵; 東洋人の発明, 桑原隲蔵全集, Vol. I, (東洋史説苑), 岩波書店, 1968.

43) 矢野仁一; 支那における近世火器の伝来について, 史林, 2 (3), 374, 2 (4), 586, 1917.

44) 黒田源次; 神機火炮論, 満州学報, 4, 43, 1932.

45) 和田博徳; 明代の鉄砲伝来とオスマン帝国, 史学, 31 (1~4), 692, 1932.

46) 貝塚茂樹; 中国の歴史, 岩波書店(岩波新書), 1964.

47) 藪内清; 中国の科学文明, 岩波書店(岩波新書), 1970.

48) 吉田光邦; 錬金術, 中央公論社(中公新書), 1963.

49) 吉田光邦; 中国科学技術史論集, 日本放送出版協会, 1972.

50) 有馬成甫; 火炮の起源とその伝流, 吉川弘文館, 1962.

51) Davis, T. L. et al.; J. Chem. Education, 11, 522, 1947.

52) Needham, J.; Science and Civilization in China, Cambridge Univ. Press, 1962.

53) 東畑精一, 藪内清監訳; 中国の科学と文明, 思索社, 1977.

54) 丁緒賢; 化学史通考, 商務印書館, 1936.

55) 李喬萃; 中国化学史, 商務印書館, 1940.

56) 馮家昇; 火薬の発明和西伝, 華東人民出版社, 1954.

57) 周緯; 中国兵器史稿, 三聯書店, 1957.

58) 趙鉄寒; 火薬の発明, 国立歴史博物館, 1960.

59) 張子高; 中国化学史稿, 科学出版社, 1964.

60) 李喬萃; 中国化学史(増訂版), 商務印書館, 1976.

61) 張子高編; 中国古代化学史, 商務印書館, 1977.

62) 自然科学史研究所主編, 周嘉華; 中国古代科技成就, 中国青年出版社, 1978.

63) 郭正昭等編; 中国科技文明論集, 牧童出版社, 1979.

64) 衛聚賢; 火与火薬, 説文書店, 1979.

65) 曹元宇; 中国化学史話, 江蘇技術出版社, 1979.

66) 天正日記(伊達家日記), 1587~1590. (小林清治校注; 戦国史料叢書, 10~11, 人物往来社, 1965~1967.)

本稿においては中国の烟火の発展史の一端にふれたものであるが、古い時代に関しては不明の点が多く、識者の御教示が得られれば著者の喜とするところである。

謝 辞

本稿執筆にあたり名大教養部長、久村因教授には極めて御多忙の中を貴重な時間をお割

き下れ御指導を載いた。また名城大、薬、伊藤一男教授には欧文の御指導を得、名大、文、森正夫教授には原典の御教示を得、名大、文、中文、岡田充博氏には漢文訳について御指導を得た。ここに深甚の謝意を表します。漢文訳については著者の責任において最終判断をし訳出した。

岩田重雄氏の“微量天びんの先駆者・
飯盛挺造”を読んで (根本曾代子)

日本計量史学にご造詣の深い岩田重雄氏は、多年にわたり理化学・薬学研究用の微量天びんを創製した先駆者を探し求めて、広範な取材活動および内外多数の文献を克明に調査せられた。その結果、表題の飯盛挺造が発明者で、かつ薬学草創期の物理学の先覚者であることを確証された。それらの研究成果を発表された「日本計量史学会誌」(Vol. 2, No. 1, 1980)に興味深く述べられている。

薬史的見地から言えば、薬学畑でない岩田氏によって、図らずも飯盛先生の知られざる一面、とくに世界的業績に関する資料をご顕示いただいた御寄与に対し、謝意を表するとともに、その一端をご紹介したいと思う。

飯盛挺造についての既知の来歴としては、明治10年(1877)東京大学医学・製薬学別課教員表に、物理学担任・助教飯盛挺造の名が初見である。次いで明治11年発行の「東京薬学新誌」および明治14年創刊の「薬学雑誌」に数回にわたって、「光線分極論」と題する論文が異彩を放っている。明治12年著訳の「物理学」によって、自然科学部門における地位を不動のものにする一方、本書は明治大正期の薬学生必読の教科書たる価値を失わなかった。

岩田氏によれば、飯盛挺造は嘉永4年(1851)8月24日、鍋島藩の陪臣、飯盛宗房の長男として肥前国いまの佐賀市で生まれた。明治4年(1871)20歳のとき医学を志して上京、外務省洋語学所でドイツ語を学び、明治7年、東京外国語学校雇となる。

その間、将来の志向であった医学をやめて、だれも見向きもしない難解な物理学を選んだ動機は不明であるが、恐らく理知的な頭脳が物理の原理にひかれて、言わば独走した道へ、新知識の摂取に直進したと思われる。

3年後にはその学才を認められて、26歳で

前記の東京大学医学部別課助教に起用されている。明治14年助教授に昇任するが、明治17年(1884)自費でドイツ・フライブルク大学に留学する。行をともにした同僚の丹波敬三助教授はエルランゲン大学で研修した。

飯盛助教授はフライブルク大学物理学研究所の E. G. Warburg 教授の指導の下に、初めて真空微量天びんの原理を開発して、適正な機器を製作した。ガラスの表面に吸着している水の質量を計量したほか、様々の実験に確信を得た。

翌年の1885年(明治18年)9月、ストラスブルク大学で開かれた研究集会の席上、Warburg 教授は協力者の飯盛挺造と、“ガラスと他の物体上の水膜の重量と電気伝導”と題する研究発表を行なった。

この報告は1886年(明治19年)1月、E. Warburg と T. Ihimori の連名で、“Annalen der Physik und Chemie, Neue Folge”に掲載された。かくして物理・化学研究用の微量天びんは Warburg と Ihimori 両氏の発明によることが世界的に確認されたのであった。

本研究の主力である飯盛挺造は、これらの研究を学位論文として2月、フライブルク大学に提出した。3月、大学から Doktor der Philosophie の学位が授与された。

前後してストラスブルク大学留学中の下山順一郎と、エルランゲン大学の丹波敬三は、それぞれドクトルの学位を得て、明治20年(1887)6月、3氏は同道で故国の土を踏んだ。下山、丹波両氏は母学教授となり、飯盛氏は金沢の第四高等学校(旧制第四高等学校の前身)教諭兼教頭に赴任した。

明治26年(1893)飯盛氏は第四高等学校を退職して、東京女子高等師範学校教授に転任したのを機に、旧知の下山東大薬学科教授が校長を兼務する東京薬学校(現東京薬科大学)教頭兼幹事を委嘱されて、私学薬育に寄与することになった。

公私の教育者として、終始、物理学の指導に力を注いだが、50台半ば頃軽い脳出血を患った。回復して教職にあったが、明治43年(1910)東京女子高等師範学校校長代理の要

職についた頃から病状が再発したため、すべての公職を辞任して、正四位勲三等に叙せられた。以後は東京薬学校教頭の任務に専念したが、大正5年(1916)3月6日、従容と65歳の生涯を閉じた。

養嗣子の飯盛里安理学博士(1885～)は東京帝大理科大学大学院卒業後英国に留学、母学理科大学講師、第一高等学校教授歴任、理

化学研究所主任研究員、同名誉研究員。日本の放射化学開拓者で、アイソトープを同位元素と訳したといわれる。

恩師の Warburg 教授(1846～1931)は元ベルリンの物理工学研究所長であった。息 O. H. Warburg (1883～1970) は元ベルリン大学教授で、1931年、酵素に関する研究によりノーベル医学賞を受賞した。

◆くすりの民俗学——江戸時代・川柳にみる

三浦三郎著, 川瀬清編, 健友館, 1980年8月10日刊, B 6 判, 278 頁, 1,600 円 (0047-0020-1956).

著者三浦氏 (1917~1977) は日本薬学会年会における薬史学部会で研究発表する常連の一人だった。常民文化の中の薬をめぐる考証は異彩を放ち、薬史学会の集談会あるいは新聞、雑誌等に随時発表される“川柳にみられる江戸期の薬”については、時には漫談調でありながらさすがに古川柳の人心の機微に触れる点を逃さなかった。

本書は三浦氏の川柳を主とした論考の編著の形となって刊行をみたもので、全巻を通じて身近にある植物や動物の中から薬用になる物を選び、治病のために用いることを唯一の頼みとする時代の民間薬あるいは民間療法のツボを心得た名句を採り上げ解釈した点が味読に値するものである。

現代の薬物のルーツとも思われる民俗の中のクスリ、根強く俗信的に伝承されてきたクスリ、それらを用いて、当然ながら症状は似ているが異なる種々な病気を同種とみて自療 (今日言うところのセルフメディケーション) する庶民の闘病の姿が描かれている。

しかも著者の幅広い薬史的な取材と考察を踏まえた比較論が随想風に織り込まれて薬物療法の今昔観を浮き彫りにしているから、読む者は感興の裡に教えられることが多い。

まず江戸期の世相を知ることなくしては、本書に盛られた数々の古川柳の妙を味わえないことを、著者は随処に手ほどきしてくれる。薬草の部に始まる縦横の筆力は読者をして頁を繰る手を休ませない。

一例を「タニシ——浮腫と利尿の妙薬」についてみると、主として「柳多留」から関連句を選んでいますが、この泥田に棲む淡水産の巻貝について科学的、文学的考証引用が精細なことは、何事も丹念にやる著者の性格を表

わしている。本朝食鑑、重修本草綱目啓蒙、和漢三才図会、金匱要略方、食事戒、食禁便覧等にひろく取材して、食と薬との接点を綴っている。

薬用動物の部では、この他、いもりの黒焼、鰮鰯臍、山椒魚、ナマコ、地竜などを、売薬の部では実母散、通和散、地黄丸、陀羅尼助、奇応丸などの関連句を採り上げ、惜しみなく秘話を語ってくれる。

まさに全篇すべて“遊び”の境地に在りながら、人間とクスリの切り離すことのできない関係を語りかけている筆の運びである。

(吉井千代田)

—会 務 報 告—

◆三史学会合同総会

日本薬史学会は1980年10月11日、12日の両日にわたり、日本大学歯学部大学院講堂において開催された第81回日本医史学会と第8回日本歯科医史学会との合同総会に参加した。医・歯・薬学のそれぞれの史学会がこのような合同企画を練って、研究面の交流をはかったことは初めてであり、特別講演3題、会長講演のほか、多彩な内容からなる一般学術報告56題を通じて参加者に対し望外の成果を与えた。

この合同総会開催に主導的な熱意をもたれた鈴木勝会長 (日本大学総長) は特別講演「日本歯科医学発展の回顧」の演述の中で、“初めは学ではなく経験から得た主として歯病との闘いから始まる。長い年月の間に時代背景と共に研究の苦心の積み重ねがあり、ついに今日見られるような歯科医学ができたと思われ、さらに将来への発展が期待される”と言われたことは、薬学についても共感するところが多いと感銘を受けた。

日本で学んだ周大成氏 (北京市口腔病院) は「中国口腔医学発展簡史」と題して、“人類が遠い昔から患った歯周病は約50万年前の北京原人についてもその痕跡がうかがわれる”として、旧石器時代から清朝までにいたる歯牙の養生管理をめぐる発展の跡を考古学的に

裏付けつつ史的考察を行なった。

また古川明氏（医史学会）は「医・歯・薬学のシンボル＜蛇杖＞」の題下に“杖からみつけた蛇は、医術をシンボライズして、健康、不老、不死までを象徴するとして、世界的に知られ、様々の図絵、マークなどに汎用されており、現代の進歩した医学のルーツを示すものだ”と興味ある史的考察を行なった。

伊藤和洋氏（薬史学会）は「アユルヴェーダの薬物」について演述したが、“人類の発生以来、不滅とも思われる太陽の光熱によって育まれる薬用植物の本質と効用もまた不変であるとするインドの伝統医学を支える思想の下に、人間の生命、健康、治病に対して大きな役割をもつ薬物（生薬）について解説したい”として、多くの新知見を与えた。

以上の特別講演のほか、下記日本薬史学会員の発表があった。

- ・ ユンベリーの来日とその意義 ○高橋文（北陸製薬）、川瀬 清（東京薬科大学）
- ・ 仙台領の隠れた本草書「賢親本草」 ヒキノヒロシ（東北大・薬学部）
- ・ 緒方洪庵使用の薬籠について 青木允夫（くすり博物館）

（吉井千代田）

◆集談会……1980年度第1回集談会を7月12日、13時30分から16時30分まで日本大学理工学部9号館、6階の薬学研究室で行なった。演題は“中国の医薬事情について”で今年中国旅行をした木村雄四郎会長、長沢元夫幹事の報告がなされた。山川浩司教授（東京理科大学）、桑木崇秀博士、津田重俊氏（日本ケミファー Co.）の追加発言もあった。

参加者は約30名。

◆第2回「薬学生のための薬史学セミナー」

1980年8月23日、24日の両日、岐阜県川島町の内藤記念くすり博物館で、昨年にひきつづき、薬学生を対象にした薬史学セミナーがひらかれた。

今回のテーマは、薬学史上に出現するいろいろな史実は、その時々、社会的状況を背景としつつ考察されるべきであるという観点で

統一されていた。

講演その1 医薬分業をめぐる

1・1 西欧における医薬分業成立の背景
（新潟薬科大学学長 安江政一）

1・2 日本における医薬分業

その特質について

（日本薬史学会 吉井千代田）

その見方、考え方

（日本薬史学会 宗田一）

講演その2 東アジア伝統医学から

中国の薬局方・和剤局方をめぐって

（東京理科大学 長沢元夫）

安江氏は西欧とくに南イタリアにおいて、フリードリヒ帝政時に公布された医薬分業が当時の財政危機と大きく関係していたことを述べられた。日本の医薬分業については、本会常任幹事、吉井氏による史実の紹介のち、日本医史学会理事、宗田氏から、医薬分業問題を国会運動史や法律解釈論の立場で論ずるのではなく、国の医療行政史、科学技術史の面から接近すべきであり、技術革新のなかで医療がどのように変わり、その中で薬剤師の技術がどう貢献するかという問題にとりくまなければならない旨強調された。長沢氏は第一線治療の経験が総括され、単純化された和剤局方を、単なる個別的記録と見るか、規格書または行動の基準書と見て活用するかによって、医療に対する貢献度が異なり、この点に関しては時代を超えた課題である旨話された。

なお夕食後、宿舎ロビーに椅子をならべ、深夜に至るまで、薬学修学上の問題点などについて話し合った。

参加者24名（内学生は21名、社会人は3名）。学生は金沢大学（3年生4名）、東京理大（3年生1名）、名城大学（大学院生1名、4年生5名、3年生2名）、岐阜薬科大学（1年生1名）、東京薬科大学（1年生1名）、昭和薬科大学（4年生1名、2年生2名、1年生3名）。社会人は名城大学教員2名、昭和薬科大学教員1名。

（川瀬清）

◆ラッセル・アインシュタイン宣言25周年に 際して（声明）

日本学術会議は第79回総会において標記の声明を採択した。日本学術会議会長・伏見康治博士より本年6月11日に会員への周知依頼があったので以下に紹介する。

今を去る、四半世紀前の1955年7月9日、バートランド・ラッセルとアルベルト・アインシュタインの両碩学の連名で呼びかけられた宣言が湯川秀樹博士等を含むノーベル賞受賞者の連署の下に全世界に向けて発表された。

宣言は、核兵器の発達とその使用のおそれ人類絶滅の脅威を現実を生み出していることを直視し、警告している。そして、世界の科学者が思想、信条、国籍、社会体制等の別を超えて一堂に会して、その危機の克服の方向を討議し、世界各国政府に対して世界戦争による国家目的の達成の不可能なことを自覚するよう、またあらゆる紛争を平和的に解決するよう勧告する決議を採択し、広汎な署名運動を起こすことを呼びかけている。

宣言は「その存続が疑問視されている人類、ヒトという種の一員」の立場に立ち、かつ核戦争の恐るべき危険を最もよく知悉している科学者こそ核兵器廃絶のために誰よりも積極的に努力すべきであるとして科学者の社会的責任を強調している。この宣言を契機として1957年バグウオッシュ会議が開催され、湯川、朝永両博士を含む広汎な世界の科学者がはじめて一堂に会し討議した結果、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神に沿う声明を採択した。

以来四半世紀の間、科学者を含む世界諸国民の世論や運動を背景として、幸い核兵器は

使用されなかった。しかし、これまで核兵器保有の根拠とされてきた核抑止論も、その後の核兵器システムの発達により、その正当性が疑わしくなり、核兵器が実際に使用される危険性が増大してきている。

核兵器の蓄積により「人類は前例のない自滅の脅威に直面」していることは、2年前国連軍縮問題特別総会が一致して採択した最終文書にも明記されている。

現下の緊迫した情勢は、「あらゆる紛争問題の解決のための平和的手段を見出すよう」各国政府に勧告した宣言の趣旨がいよいよ現実的なものとなりつつあることを示している。

日本学術会議は、創立にあたって、これまで日本の科学者がとりきたった態度について強く反省するとともに科学を文化国家、世界平和の礎たらしめようとする固い決意を内外に表明した。それ以来、とくに1954年のビキニ水爆実験以後、核兵器の廃絶については常に重大な関心を抱き、核兵器の実験、製造、貯蔵、使用に反対するため多くの勧告、声明、アピール等を行なってきた。本会議がラッセル・アインシュタイン宣言の趣旨に賛同し、バグウオッシュ会議声明を全面的に支持する決議を行なったのは当然である。

本年、ラッセル・アインシュタイン宣言25周年を迎えるに際し、本会議は従来一貫してとってきた立場を想起しつつ、改めて同宣言の精神と意義とを再確認し、今日なお実現していない核兵器廃絶という全人類の悲願を達成するため、科学者としての社会的責任を果たすべく一層の努力を傾ける決意である。

ここに内外の科学者、学術団体等が本会議のこの声明を支持し、協力されるよう強く訴えるものである。

会 員 名 簿 (1980年12月現在)

賛 助 会 員

伊 藤 和 洋	112	文京区水道 1-8
稲 垣 薬 局	180	武蔵野市吉祥寺本町 1-20-1-506
浮 舟 印 彦	630-02	生駒市辻町 399-36 ガーデンハイツ 12-301
㈱ウチダ和漢薬	116	荒川区東日暮里 4-4-10
㈱宇津救命丸	101	千代田区神田駿河台 3-3
㈱エーザイ	112	文京区小石川 4-6-10
エスエス製薬㈱開発一課	103	中央区日本橋浜町 2-12-4
㈱太田胃散	112	文京区千石 2-3-2
大 杉 製 薬 ㈱	545	大阪市阿倍野区旭町 2-4-14
カネボウ薬品㈱第二学術部	107	港区元赤坂 1-3-12
㈱紀伊国屋漢薬局	101	千代田区外神田 1-2-14
小太郎漢方製薬㈱学術部	531	大阪市大淀区中津 2-5-23
佐々浪ファーマシー	617	長岡京市天神 2-7-14
㈱佐藤薬学研究所	156	世田谷区桜上水 3-20-3
三 和 生 薬 ㈱	320	宇都宮市平出工業団地 6-1
高 木 英 一	390	松本市沢村 2-4-26
武田薬品工業㈱京都試験農園	606	京都市左京区一乗寺竹之内町 11
内 外 新 薬 ㈱	156	世田谷区経堂 5-32-11
日本漢方協会	116	荒川区東日暮里 4-4-10
㈱薬業時報社	101	千代田区神田神保町 2-36

一 般 会 員

相 見 光 郎	168	杉並区浜田山 3-20-10
青 木 允 夫	453	一宮市大和町馬引字古宮 82-1 馬引コーポラス505
赤 松 金 芳	248	鎌倉市雪の下 1-10-18
秋 元 敦 信	990	山形市あずま町 3-43
我 妻 洋 志	014-03	秋田県仙北郡角館町岩瀬西下夕野 5871
有 地 滋	560	豊中市寺内 2-6 緑地グランドマンション東1002
飯 島 幸 次	631	奈良市西登美丘 8 丁目 6-22
飯 野 節 夫	870-11	大分市旦野原 大分大学講内宿舍 1 の11
伊 沢 一 男	329-06	栃木県河内郡上三川町 5030
石 坂 哲 夫	105	港区芝公園 1-5-30 共立薬科大学
石 谷 熊 夫	156	世田谷区松原 2-26-15

石 福 覚 治	248	鎌倉市七里ヶ浜【1-7-10
一丁田 健 一	180	武蔵野市吉祥寺南町【4-17-12
稲 垣 勲	458	名古屋市緑区鳴海町白山 20
岩 谷 成 彦	670	姫路市威徳寺町 57-1
岩 淵 準	280	千葉市幸町 2-12-1-309
上 田 直 辰	590	堺市協和町 4-465 耳原病院
浦 田 耕 作 (京極三郎)	606	京都市左京区下鴨東梅ノ木町 21
エーザイ(株)川島工場	483	岐阜県羽島郡川島町竹早町 1
大久保 清 史	319-24	那珂郡緒川村上小瀬 2090
大 熊 房太郎	187	小平市大沼町 1-136
大 槻 彰	113	文京区湯島 2-30-11
大 塚 敬 節	160	新宿区三栄町 13
大 塚 恭 男	160	新宿区三栄町 13
大 西 博	210	川崎市川崎区駅前本町 7-5
岡 崎 良 明	780	高知市寿町 6-7
岡 田 登	466	名古屋市昭和区広路町松風園 68-7
小 川 一 恵	194	町田市成瀬台 1-15-14
奥 沢 章	221	横浜市神奈川区神大寺町 805
奥 富 康 雄	187	小平市学園西町 2-25-19
奥 田 潤	468	名古屋市天白区天白町八事裏山 名城大学薬学部
小 瀬 洋 喜	500	岐阜市加納鉄砲町 3-31
織 田 隆 三	635	奈良県大和高田市北本町 7-25
男 全 精 一	110	台東区上野 1-6-7
樫 田 義 彦	164	中野区東中野 4-6-7 東中野パレスマンション503号
金 枝 正 巳	812	福岡市東区馬出 3-1-1 九州大学病院薬剤部
金 生 悦	604	京都市中京区柳馬場姉小路上 3
金 岡 又左衛門	930	富山市新庄町 38
金 庭 延 慶	142	品川区旗の台 1-5-8 昭和大学薬学部
金 子 力	193	八王子市めじろ台 2-2258-11
川 島 繁 男	164	中野区中央 5-8-23
川 瀬 清	192-03	八王子市堀ノ内 1432 東京薬大
神 田 和 正	632	天理市樺本町 2400
北里大学白金図書館 (東洋医学総合研究所)	108	港区白金 5-9-1
北 野 潔	533	大阪市淀川区大桐 5-15-43
木 下 要 三	545	大阪市阿倍野区旭町 2-4-14 大杉製薬(株)
木 村 治	470-01	愛知県愛知郡日進町梅森新田 135-154
木 村 雄四郎	180	武蔵野市吉祥寺東町 2-8-8
木 村 吉 孝	171	練馬区小竹町 2-17

京都薬科大学図書館

久保 道 徳
桑 木 崇 秀

小 池 三良助
甲 田 研
小 島 育 郎
小曾戸 洋
狐 塚 識 夫
後 藤 志 朗
小 林 正 夫
小 松 曼 耆
小 山 鷹 二

埼玉医科大学図書館

酒 井 シ ズ
桜 井 謙之介
佐々木 盛 三
佐 藤 孝 俊
佐 藤 文比古
佐 藤 嘉 記
沢 田 徳之助

嶋 田 玄 弥
嶋 野 武
島 村 敏 夫
嶋 本 みつゑ
志 水 浩一郎
庄 司 良 文

菅 谷 愛 子
鈴 木 五 郎
鈴 木 英 夫

関 正 夫

宗 田 一

高 木 章之助
高 橋 周 七
高 橋 文
高 橋 雅 夫

607 京都市山科区御陵中内町 5

577 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学薬学部
153 目黒区青葉台 3-3-2-14

615 京都市右京区西院東今田町 3

510-02 鈴鹿市南旭ヶ丘町 2-13-4

577 東大阪市長栄寺 1-44

750 下関市竹崎町 2-11-1

560 豊中市東泉丘 2-5-1-711

274 船橋市大穴町 233-11 B棟302

187 小平市中島町 72 東京都薬用植物園

272 市川市中山 2-18-2

703 岡山市原尾島 508-9

350-04 埼玉県入間郡毛呂山町大字毛呂本郷 38

113 文京区本郷 2-1-1 順天堂大学

930-11 富山市花園町 3-3-35

251 藤沢市鵠沼海岸 6-16-20

299-32 山武郡大綱白里町駒込 701-1

114 北区田端新町 2-29-10

351 和光市新倉 1-29-16

607 京都市東山区山科東野舞台町 97

607 京都市山科区栂辻池尻町 10

500 岐阜市雲井町 3-14

560 豊中市本町 6-10-10

632 天理市柳本町 1041

671-25 兵庫県宍粟郡山崎町今宿 274-8

419-01 静岡県田方郡函南町仁田楠台 771-7

350-02 坂戸市けやき台 1-1 城西大学薬学部

560 豊中市刀根山 6-4-12

194 町田市南つくし野 3-11-17

144 大田区蒲田 5-16-8 ㈱ラブ・カメラ・ジャパン

615 京都市西京区桂市ノ前町 43-8

693 出雲市塩治町 89-1 島根医科大学附属病院

274 船橋市三咲町 372-17

164 中野区本町 2-28-11-403

152 目黒区八雲 1-4-6-401

- | | | |
|---------------|--------|---------------------------------------|
| 高橋三雄 | 983 | 仙台市小松島 4-2-16 |
| 高原叶 | 563 | 池田市姫室町 9-1 |
| 滝戸道夫 | 144 | 大田区南蒲田 1-14-21 |
| 滝浦潔 | 658 | 神戸市東灘区御影中町 6-6-3 |
| 竹内節弥 | 113 | 文京区千駄木 1-1-5 日本医大薬理学教室 |
| 武田科学振興財団 | 533 | 大阪市淀川区十三本町 2-17-85 |
| 竹中茂夫 | 026-02 | 釜石市野田団地 12-8-49 |
| 立山弥七 | 350 | 川越市大字笠幡 5024-52 |
| 辰野美紀 | 530 | 大阪市北区常安町 33 大阪大学医学部衛生学教室 |
| 田中助一 | 758 | 萩市東田町 42 |
| 田中俊弘 | 501-21 | 岐阜市三田洞東 5-6-1 岐阜薬科大学 |
| 田辺普 | 113 | 文京区西片 2-2-9 |
| 谷武治郎 | 557 | 大阪市西成区玉出東 2-5-12 |
| 谿忠久 | 589 | 南河内郡狹山町西山 380 近畿大学医学部内
近畿大学東洋医学研究所 |
| 玉置新治 | 153 | 目黒区駒場 1-40-9 |
| 田村哲彦 | 272 | 市川市南八幡 5-1-1 タムラ薬局 |
| 津田妍子 | 192-02 | 多摩市豊ヶ丘 5-1-8-504 |
| 津村研究所 | 201 | 狛江市和泉本町 1-9-9 |
| 帝京大学薬学部図書館 | 199-01 | 津久井郡相模湖町寸沢嵐 1091-1 |
| 寺阪正信 | 166 | 杉並区高円寺南 3-27-6 |
| 榊東海書店(金涛) | 606 | 京都市左京区田中門前町 98 |
| 東京薬科大学附属図書館 | 192-03 | 八王子市堀ノ内字 17-1432-1 |
| 長沢元夫 | 168 | 杉並区大宮 2-1-20 |
| 中島繁美 | 635 | 大和高田市築山 370-12 |
| 長浜敏久 | 275 | 習志野市津田沼 4-8-9 |
| 中村泉美 | 141 | 品川区小山 6-23-18 |
| 中村皓一 | 567 | 茨木市玉水町 9-91 |
| 中室嘉祐 | 578 | 東大阪市南鴻池町 2-9-3 |
| 名久井敏男 | 154 | 世田谷区太子堂 3-11-13 大塚荘 |
| 難波恒雄 | 930-01 | 富山市杉谷 2630 富山医薬大和漢薬研究所 |
| 西川隆 | 233 | 横浜市六ツ川 3-47-4 |
| 西川洋一 | 201 | 狛江市和泉本町 1-28-2 |
| 新田あや | 603 | 京都市北区平野宮敷町 37 |
| 日本出版貿易雑誌課専門誌係 | 101 | 千代田区猿楽町 1-2-1 |
| 根本曾代子 | 413 | 熱海市伊豆山岸谷 289 |

野 上 寿	167	杉並区井草 2-16-3
野 事 寛 山	606	京都市左京区下鴨森本町 15 (財)生産開発科学研究所
野 瀬 弘 美	194	町田市小川 1538-28
野 村 新太郎	468	名古屋市天白区八事裏山 15 名城大学薬学部生薬教室
橋 本 竹二郎	930-01	富山市杉谷 富山医薬大・薬・薬草園
橋 本 庸 平	662	西宮市霞町 5-44
浜 田 善 利	862	熊本市大江本町 5 番 1 号 熊本大学薬学部生薬学教室
林 平三郎	700	岡山市表町 3-5-1 林薬品KK
早 津 清 二	146	大田区久ヶ原 1-38-5
東 丈 夫	662	西宮市奥畑 6 番 134 シーアイマンション第2 夙川301号
広 川 力	755	宇部市上宇部市川添町 2400-1
藤 田 義 晴	733	広島市己斐上 4-353-1 大迫団地
帆 足 勇 夫	336	浦和市根岸 106
不 破 龍登代	112	文京区小日向 2-19-15
松 岡 徹 正	176	練馬区豊玉上 2-19
松 下 正 己	359	所沢市中新井 5-7-14
松 村 愛 子	752	下関市長府町才川一町 550
松 本 仁 久	061-02	北海道石狩郡当別町 東日本学園大学歯学部
松 吉 康 夫	101	千代田区神田神保町 3-10 宝栄ビル
真 庭 輝 嗣	001	札幌市北区北14条西 4 丁目
水 谷 米	274	船橋市新高根 3-6-9
水 野 瑞 夫	502	岐阜市三田洞東 5-6-1 岐阜薬科大学
宮 城 洋 子	214	川崎市多摩区中野島 1485-5
宮 道 悦 男	583	藤井寺市恵美坂 2-8-4
宮 本 法 子	192-03	八王子市堀の内 1432-1 東京薬大ドイツ語教室
三 好 卯三郎	605	京都市東山区今熊野宝蔵町 65
村 上 誠 慤	862	熊本市大江本町 5-1 熊本大学薬学部
森 清 茂	546	大阪市東住吉区田辺西の町 3-2
森 康 己	700	岡山市岡 164 岡山大学附属病院薬局
森 山 健 三	589	南河内郡狭山町西山台 5-5 狭山ハウス3-504
矢 数 道 明	162	新宿区新小川町 2-20
安 江 政 一	950-21	新潟市寺尾 933-30
矢 部 一 郎	180-03	東久留米市滝山 2-5-7-104
山 口 一 孝	157	世田谷区成城 1-24-14

山下 愛子	165	中野区江原町 2-14-12 第一あさひ荘
山下 光雄	160	新宿区信濃町 35 慶応病院食養課
山田 光胤	166	杉並区阿佐谷南 2-11-25
山内 盛	101	千代田区神田駿河台 1-8 日大理工学部
吉井 千代田	157	世田谷区成城 5-11-21
吉岡 信	110	台東区三ノ輪 2-14-9
吉田 一郎	366	深谷市深谷町 10-28
米田 該典	565	吹田市山田上 133-1 大阪大学薬学部
梁 哲周	111	台東区浅草 2-3-20
若井 澄	571	門真市大字打越 324-2
渡辺 武	617	京都府向日市寺戸町西野 6
綿本 友枝	165	中野区大和町 3-20-3

海外（一般会員）

那 琦	台北市広川街八巷16号
張 相 吉	大韓民国ソウル特別市西大門区忠正路 3 街 393
	薬業新聞社内

学 生 会 員

内田 浩市	277	小田原市中里 277
大島 行雄	361	行田市行田 13-11
林 俊清	930	富山市五福九区 3601-4 千草ハイツ304
船山 信次	981-11	仙台市四郎字渡道 15-2
本田 景三	182	狛江市和泉 1290 皆川荘
松江 一彦	136	江東区亀戸 6-25-3

編集幹事：長沢元夫，川瀬 清

昭和55年（1980）12月25日 印刷 昭和55年12月30日 発行
 編集兼発行人：東京都千代田区神田駿河台 1—8 滝戸道夫
 日本大学理工学部薬学科内
 日本薬史学会
 印刷所：東京都文京区後楽 2—21—8 サンコー印刷株式会社

滋養強壯生薬製剤 飛蔘四物湯



***** 適応症 *****

次の場合の滋養強壯：
 肉体疲労・血色不良
 冷え症・胃腸虚弱
 食欲不振・病中病後
 虚弱体質



エスエス製薬株式会社

東京都中央区日本橋浜町2-12-4